座敷童を飼ってみた

小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
座敷童を飼ってみた

【Ｎコード】
Ｎ４７８９Ｖ

【作者名】
小豆

【あらすじ】
ある夜突然そいつは現れた。フローリングの部屋に住み着くことになった座敷童。平凡すぎる生活が一変、笑いあり、涙（？）ありのはちゃめちゃな高校生活が始まった。＊非現実コメディー小説です。初心者です。更新不定期です。鼻で「ふふっ」って笑えるような話を目指して頑張ってます。

登場人物（前書き）

随時更新予定。※ネタバレ注意

登場人物

加藤家

・加藤涼介（かとうりょうすけ）
主人公。見た目の特徴はあえてえげるなら左目の下の泣きぼくろ。
その他平均値を駆け抜ける普通の高校男子。

・座敷童（ざしきわらし）
淡い青色の着物をきたおかっぱ頭の男の子。
見た目は五歳児。可愛らしい容姿とは裏腹に毒舌。
涼介と契約を交わす。媒介は澄んだ水色のビー玉。

・加藤佳恵（かとうよしえ）
涼介の母

・加藤孝治（かとうたかはる）
涼介の父

・加藤トメ（かとうとめ）
涼介の曾婆ちゃん。諒介にビー玉を渡す。

学校

・長谷川一真（はせがわかずま）
涼介の幼馴染。ふわっとしたくせ毛で小柄な体格。陸上部、短距離。

・風間昶（かざまあきら）
黒髪黒縁メガネのクール系イケメン。陸上部、長距離。

・佐々木美歩（ささきみほ）
涼介の片思いの相手。栗色のセミロング。かわいらしい容姿。

・田辺千夏（たなべちなつ）
陸上部。美歩の親友。幅跳び。

・本田祥司（ほんだしょうじ）
涼介の担任兼陸上部顧問。

・森岡弘毅（もりおかこうき）
陸上部部長三年生、ハンマー投げ。
長身に逆三角形のがっしりとした体格。あだ名は「モリ」。

・桜木春奈（さくらぎはるな）
陸上部三年、マネージャー。
スタイル抜群で学校Ｎｏ．１の美女。あだ名は「サクラ」。

・松田凛久（まつだりく）
陸上部三年、短距離。
優しくて爽やかなお兄さん系。あだ名は「りっくん」。

・篠宮雅紀（しのみやまさき）
陸上部三年、ハードル。
前髪で顔が半分隠れているため、普段は目が隠れている。あだ名は「シノ」。

・星野蓮（ほしのれん）
陸上部二年、長距離。双子兄。
ちょっとしたファンクラブができるほどの人気ぶり。
髪色はナチュラルブラウン。

・星野珪（ほしのけい）
陸上部二年、中距離。双子弟。
兄の蓮同様人気者。髪色はダークブラウン。

・渡辺詩織（わたなべしおり）
陸上部二年、高跳び。
無口で無愛想。いつも無表情。

1、こんばんは変な奴

加藤涼介（かとうりょうすけ）（１６）
日本の普通すぎる一般高校生男児

見た目ふつう。特徴・・・
あえていうなら左目の下の泣きほくろ？

勉強そこそこ、運動そこそこ

あ、体力だけはちょっと自信あり。
それが俺です。

そんな俺、なんか最近ついています。

第一志望だった高校にも無事合格をはたし
中学から思いを寄せている子とも念願の同じ学校。
そんで今まさに目の前にはクラス発表の一覧が張り出され

１年２組１２番加藤涼介

・・・・・・は俺で、

1年2組17番佐々木美歩(みほ)

はい、きた！美歩ちゃん！
席うまくいけば隣じゃない？
どっちにしろ近いよね？うわ、テンションあがる！

自然と顔がにやけるのもしょうがない。

あ、ちなみに恋愛経験なんて今だゼロの万年片思い野郎です。
当たって砕けろ！砕けたー・・・がお決まりパターン。
なのでまだ俺の想いはまだ彼女には封印中です。

いいね、最近。なんかいいんじゃないのこれ？
青春してやろうじゃないの！

ちなみに部活動は陸上部に入部予定。
先ほど言った体力の自信はこれが理由なわけで。
中学から長距離をやっていて、走るのは好きだ。

「よう涼介！クラス一緒だな！
中学に引き続き今年もよろしくー！」
「ぎゃ！！」
急に背中をばしっと叩かれた。
犯人は長谷川一真（はせがわかずま）、腐れ縁の幼馴染だ。
「まさか一真まで同じクラスなんてな。
これなら新学期も心配ねえや」
にかっと笑いかける。ちなみにこいつも陸上野郎。
「までってなんだよ、またお前あれか？
佐々木の名前しか見てなかっただろ」
「げ、ばれてた？」
「ばーか、お見通し」
けらけら笑いながら家に帰る。
なんたって地元の学校だから、通学が楽なのもいい。
一真と別れてひとりになると、自然と鼻歌を口ずさんでしまった。
そんなこんなで夜になる。
「なんか今日もいい日だったなー」

独り言を呟きながら自分の部屋のベッドに倒れこむ。
いつからだろう？
人生が平凡すぎてつまらなくて
とりあえず中学時代はそれなりに部活頑張っていたくらいで
特に充実を感じたことはなかった気がする。

それがここ最近これだ。

なんか変わったことと言えば・・・
「・・・これか？」

曾婆さんからもらったお守り。
約半年前、亡くなる前にもらったものだ。
小さな赤い袋の中には澄んだ青い色のビー玉が入っている。

曾婆さんが大事そうにしていたものだったから、
受け取ったときは同じくらい大事にしないとと思った。

それからいつも肌身離さず見えないように首からぶら下げている。

「兄弟いないし、一人の曾孫だから大事にされてたのかなー」

手の中でビー玉を転がしてみる。

「綺麗だけど普通のビー玉なんだよな」
「あぁ、だからそれを今すぐわしに返せ」

・・・え？

「だーかーら！返せといっておる！」

「出たーーーーー！！！！！」

誰もいないはずの俺の部屋。
今目の前にそれはそれは完成されたおかっぱ頭の子供がいる。
淡い青色の着物を着ていて、
くりっとしたまん丸の瞳が俺をまっすぐ見つめている。

・・・いや、睨んでる。

「さ、叫ぶな！うるさい！」

「だ、だだ誰だお前！あれだな、幽霊！今、夜の・・・」

8時

「・・・え、ありなのこの時間？」
もう一度子供に振りかえる。
目がくりくりしているためとても愛らしい顔立ちだが
おそらく男の子だろう。
一人称、「わし」とか言ったし・・・

「そ、そこらの幽霊なんかといっしょにするな！
わしはれっきとした座敷童じゃ」

・・・・え？

「・・・君いくつ？」
「少なくともお前より年上じゃ」
「いや見た目5歳・・・」
「知るかぼけ」
「・・・お家どこ？」
「今はお前の家じゃな」

なに・・・こいつ。

2、おかっぱ頭はちゃーむぽいんと

突如俺の前に現れたかと思うと人に向かってでかい口をきく男の子。
さらっと座敷童だとか名乗ったけども何者かは定かじゃない。
二人の間に不思議な空気が流れる。

その時、階段をぱたぱたと上がってくる足音がした。
「涼介(りょうすけ)―？どうしたのー？」

母さんだ！
どうやら先ほどの俺の叫び声が下の部屋まで聞こえていたらしい。

「む、母殿か？」
座敷童もドアの方を向く。
これはこいつを追い出すチャンスじゃないのか？

「涼介―？開けるわよ？」
がちゃっとドアノブが動く。

「ちょっと、母さん！」
俺はさっと目の前の座敷童を抱き上げた。
「ぎゃ！何をする！」

あ、つかめた。
しかもやはり見た目のまんま重さも子供。

「あんた声が大きいわよ、ご近所さんに迷惑でしょー」
母が部屋をのぞきこんだ。

「見て母さん！この子供！いきなり俺の部屋に・・・」
「子供？」
「ほら、こいつ」
「どこにいるのよ、子供なんて。あんた頭大丈夫？」

・・・うそ？

「え、母さん見えないの？ほら、これ・・・」
抵抗するのを諦め不機嫌そうな表情をしているが、
確かに座敷童はおれの腕の中にいた。

「とにかくもう夜なんだから騒がないでねー。
あ、お風呂まだなら早めに入っておきなさいよー」

そういうと母さんはドアを閉め、また下の部屋へと戻っていった。

足音が聞こえなくなる。

俺は呆然とドアを見ていた。
見えてない？母さんにこのガキは見えてないの？

「おい」

痺れを切らした座敷童が俺を見上げる。
「いい加減におろさんか、無礼者」
「え？あ、あぁ」
とりあえずまたベッドの隣へ座らせてやる。

「お前、俺にしか見えないのか？」
「基本的にはな」
「なんだよそれ」
「そのビー玉じゃ」
そう言うと座敷童は俺の横に転がっているビー玉を指差した。
さっきこいつを抱いたときに落としたらしい。

「それを持っている奴にはわしの姿は見える。
あと触った奴にも見えるようになる。
今それの所有者はお前じゃろ？」

「なんで・・・いや、まず落ち着こう」
俺は大きく深呼吸をした。
「わしは最初から落ち着いておる。
お前が勝手に騒いでいるだけじゃろ、この小心者め」

「お前ほんと言葉悪いな」
「余計なお世話じゃ」

つっこむのはこのくらいにしないと永遠と続きそうな感じだ。
俺は、座敷童がすぐにいなくなりそうにはないので、
とりあえずこいつについて質問攻めしてみることにした。

「で、お前なに？」
「だから座敷童と言ったじゃろう」
「まぁ普通の人間ではなさそうだな・・・
さっきからこのビー玉を返せと言うがなんでだ？
これは俺が曾婆ちゃんから正式にもらった、俺のものだ」
「ふん、面倒じゃがちゃんと説明しないとだめみたいじゃな」

座敷童はだるそうに腕を組むと話し始めた。

「確かにそれはトメ殿がお前に渡した。
契約をお前に移したんじゃ」
「待て、お前俺の曾婆ちゃん知ってるのか？」
「あたりまえじゃろ！ビー玉の前の所有者はトメ殿、
わしが前まで契約していたのはトメ殿じゃ」
「契約とかついていけないんですけど・・・」
「あー！一から話すのは面倒じゃのー。
まあ最初はお決まりパターンじゃ、しょうがない」

ふぅっとため息をつき、また口を開いた。

「わしら座敷童は各々が前世で強い思い入れのあるものを
媒介にしてこの世にとどめられる。
そしてそれを持つ所有者と契約をして見守るのがわしらの定めじゃ。
トメ殿は自分の意思でそのビー玉をお前に託した。
つまりわしはトメ殿からお前に契約をのりかえたことになる」
「わしら、って・・・いっぱいいるのか？」
「あーまぁ・・・じゃが安心しろ。
パートナーで戦うとかないから」
「いや誰もそんなバトル漫画期待してねえよ」
座敷童は真顔でさらっと変なこと言う。
すかさずつっこまずにはいられない。
「じゃあ何・・・つまりこの半年間俺はお前に見守られてきたわけ？」／
「そうじゃ」
「じゃあ入試に受かったのも、クラスがよかったのも・・・」
「わしじゃ」
「アイスで当たり棒がでたのも、５００円拾ったのも・・・」
「全部わしじゃ」

・・・・あれ？

「なんか小さくね？」
「なにがじゃ」
「いや、座敷童ってもっとこう・・・
宝くじ一等とか、埋蔵金見つけるとか・・・」
「お前が買わなきゃ当たるもんも当たるわけないじゃろ」
「そんなもんなの？！」
「まあ確かに・・・」

急にふっと座敷童はうつむいた。

「中には契約者の身代わりとなって
自分の命とはひきかえに
事故や病気から救う奴もおる・・・」

その表情は悲しそうだった。
「お前・・・」

「安心せい、涼介！」

にこっと顔を上げて微笑んだ。
こいつ、なんて優しい・・・・

「お前が死ぬ時は喜んでそのビー玉を奪い
次の素敵な契約者の元へ走るからの」

ふっと黒い笑みを浮かべている。
今俺は一秒前に抱いた考えを訂正したい気持ちでいっぱいです。

「お前可愛くないな」
「なにを！トメ殿は毎日愛でてくれたわい」

「てか俺の名前知ってるじゃん」
「そりゃ半年・・・いや、お前が生まれた時から
トメ殿の横で見てきたからの」
「まじ？！」
「まじじゃ」
「そして俺は半年間も気づかなかったのか・・・」
「そりゃ、わしが気づかれないようにしてたからな」
「え？」
「学校にいる時は用具入れの中から。
部屋にいるときはあのタンスの上から・・・」
「怖い！やめろ！それ以上言うな！」

想像すると気持ち悪い。

そして軽くストーカーなところに寒気がして
思わず鳥肌が立つ。

「で、それはそうとなんで返さなきゃいけないんだ」
「わしはお前がトメ殿が大切にしていた曾孫だと知っていたから、
これもわしが大好きなトメ殿の意思だと思って見守ることを決意した」
「いいじゃんそれで」
「でも半年見守ってきて分かったんじゃ」
びっと座敷童は俺に指を向ける。

「お前、つまんない」

はあああああ?!

「おい、こらガキ。人に指さすなって教わらなかったのか」
「知るか。とにかくわしはもうお前みたいなやつに
小さな幸せやるのに疲れたんじゃ。・・・まあ飽きたみたいな」
「おい、ぼそっとなんか付け足しただろ」
「それともう一つ気づいたんじゃ」
「・・・・・」
黙って回答を待つ。

「わしってば、おばあちゃん子？」

「黙れおかっぱ」
「可愛がられるタイプ？」
「知るか」

「とゆーわけで、お前が契約破棄してくれれば
わしは好きな人のとこにいけるんじゃ。
分かったらさっさと所有権を譲れ」

確かにこんな生意気な奴、さっさといなくなってほしいと思った。
が、俺は少し考えた。
今までつまらなかった生活が少し充実してきたのは
全てこいつがきてからなわけだ。
人のおかげってのは癪にさわるが、
今までの平凡な生活に比べたら面白いかもしれない。

「よし、決めた」
「おぉ！やっと返してくれる気に・・・」
「お前は俺と正式に契約したってことだ」
「・・・は？」
座敷童の笑顔が一瞬にして凍りついた。

「トメ婆ちゃんは俺にこれをくれたんだ。
しばらくよろしくな、座敷童」

にっと笑いかけてやる。
座敷童は絶望的な顔で俺を見上げている。
「・・・幸せは、安売りせんぞ」
「まぁいいだろう」
「おのれ、所有権をいいことに・・・」
「ところでさー」

座敷童を一回静める。
「・・・なんじゃ」
「お前名前ないの？座敷童って呼びにくいんだけど」

「・・・ざー君と呼べ」
「は？」

「チャームポイントはおかっぱ頭じゃ、よろしくな涼介っ」

ぱちっとウインク。
きらっと星が飛んだのは気のせいだろうか。
やけに手慣れた自己紹介。

「誰が呼ぶか！！」

どうやら開き直ったらしいこの座敷童。
長い付き合いになりそうだ。
そしてこれが、俺の風変わりな非日常生活の始まりだった。

3、ニックネームも楽じゃない

ジリリリリリリリリ……

目覚まし時計の音が鳴り響く。
起きなきゃ、止めなきゃって分かってはいるが
布団から出たくないのが朝の誰もが初めに抱く欲求だろう。
あと5分―・・・

その時だった。
急に体がずしっと重くなる。
なんだこれ？まさか、これがいわゆる金縛り・・・！

「起きろ涼介（りょうすけ）！朝じゃ！早くこのうるさいのを止めろ！」

うっすらと目を開けると目の前には鳴り響く目覚まし時計。
俺の体の上におかっぱ頭の男の子がまたがり、

顔にぐいぐい目覚まし時計を押し付けてくる。
そしてだんだん寝ぼけた頭に昨夜の出来事がよみがえってきた。

加藤涼介、今日から晴れて高校一年生。
そして同時に座敷童との共同生活がスタートしました。
ちなみにこの座敷童、見た目の可愛さとは裏腹に

「聞こえておるか！起きろボケナス！」

・・・かなり毒舌のようです。

「あーわかったから！」

俺は耳元に突き付けられた目覚まし時計のうるささに耐えきれず、
カチッと音を止めるとしぶしぶ布団から起き上がった。

「寝坊は不幸とみなした。だから起こしてやったんじゃ、喜べ」
「なんか幸せの提供のしかた、雑じゃない？」

俺は洗面台に向かい顔を洗い、着替えてしたくをすませると
朝食をとるため一階の台所に向かった。
座敷童もてくてくとついてくる。

台所では母さんが俺と父さんの弁当の準備をしていて、
父さんは中央のテーブルで新聞を開きながら朝食を食べていた。

母さんが驚いた顔で振り向く。
「あら、珍しい。私が呼ぶ前に自分で起きてくるなんて」
「今日から高校生だもんな、偉いじゃないか涼介」
父さんもコーヒーをすすりながらこちらを向く。

「あ、あぁ。まぁ・・・」
へらへらと笑いながら俺もテーブルについた。
「何を笑っておる、わしにたたき起こされただけじゃろうに」
隣で座敷童がぶつぶつと何か言っているが、
父さんも母さんも全く反応していない。
どうやら認識してないと声も聞こえないようだ。

朝食はトーストとサラダとソーセージに、昨晩の余りものだった。
俺がトーストをほおばると、
それを座敷童がじっと物欲しげな目で見つめた。

「美味しそうじゃのう」
「ん、お前って食べれるの？」
「なんか言ったか？」

向かい側に座っている父さんが新聞から顔をあげた。
「い、いや何も！」
俺は慌てて牛乳を口に流し込む。
座敷童は話し続けていた。
「わしらは食べなくても平気じゃが、唯一の娯楽ってところじゃな。
お前がわしにそなえてくれれば味わうことができる。
物を直接体に吸収はできないがな。
トメ殿は毎日わしにも食事を与えてくれたもんじゃー」
上目づかいでちらちらと俺を見てくる。

「ふーん・・・どうすればいいんだ？」
「食べさせてくれるのか！」
「別に無くなるわけじゃないなら、
お前が食べたそれを俺が食べればいいだけだし・・・」
「嬉しいぞ涼介！久しぶりの食事じゃ！」

するとまた父さんが心配そうな顔で俺を見る。
「おい、お前どうした？ひとりでぼそぼそ、やっぱり変だぞ」
母さんが目玉焼きを運んできた。
「この子昨日の夜からちょっとおかしいのよ。
子供！とか言って・・・
もう私に兄弟の期待はしないでって言ってるでしょー」
いや、誰も期待してないよと思いながら目玉焼きを受け取る。
「別になんでもないって、ちょっとその、考え事を・・・」
適当な言葉でごまかす。
隣では座敷童は早く食べたいのかそわそわしていた。

「涼介、こうじゃ！
わしに向かって仏壇に参りをするように拝むだけでいいんじゃ」
「え？こうか？」

俺は座敷童に向かって両手を合わせて頭を下げた。
顔を上げた時、目の前にいたのは母さんだった。
いや、正確に言うと座敷童を母さんの体が通り抜けている。
体も認識してないと触れないのか・・・
と、感心していると母さんがわなわな震えている。

「か、母さんどうした・・・」
「涼介、あんた・・・・」
「い、いや、これは別に」
「やめて涼介！そんなに兄弟を頼まれても無理よ！」
「涼介、母さんを困らせるな！そして俺も困らせるな！
いや俺だってまだまだ現役ではあるが・・・」
「何言ってんのよあんた！」

「母さんも父さんも誤解だあああああ！」

加藤家三人、わあわあ騒いでいる傍らで、
座敷童は幸せそうに目玉焼きを口いっぱいにほおばっていた。

―――――――――――

「ざしき、ざっしー、ざしわら・・・」
俺は登校道を腕を組みながら歩いていた。
「何をぶつぶつ言っておるんじゃ？」
座敷童は後ろから俺の肩に腕を回してしがみついていた。
左の耳元で声がする。
「お前の呼び方だよ」
「だからざー君と呼べと言っただろう」
「誰が呼ぶか」

呼べ！とぽかぽか頭を叩いてくる。

それにしても不思議だった。
昨夜抱き上げた時は確かに子供の重さを感じたのに
今は背中に乗っかっているが少しも重さを感じない。
頭の痛みは感じるが・・・

「お前、体重変えられるのか？」
「もちろんじゃ、わしを誰だと思っておる。
お前の負担も考えてやっているんじゃ、感謝しろ」

「いや座敷童だと思うことにしたけど・・・」
「その気になれば空も飛べるはず」
「じゃあ飛べよ」
「いややっぱ飛ぶのは白装束（しろしょうぞく）というルックスの問題が」
「知るか！！！」

思わず声がでかくなる。

「そもそも座敷童って部屋にいるもんじゃないのか？」
「引きこもりも多いがな、基本的には契約物と共にいるもんじゃ。
お前がそのビー玉を首から下げとるから、
わしもお前の近くなら移動可能じゃ」
「ふーん、まあ知らないところで変なことされるよりは
近くにいてもらった方が安心だな」

「それより涼介」
「ん？」
「お前もうちょっと学んだ方がいいぞ」

何のことだ？と思い周りを見ると
近くを通る人たちがやけに冷ややかな視線を俺に向けている。

いや違う、これはいわゆる痛い視線だ。

俺は急に恥ずかしくなり声を抑える。
「お前そういうことは早く言え！」
「ふん、教えてもらっただけでも感謝するんじゃな」

その時ばたばたと後ろから足音が聞こえてきた。

「おはよう涼介―！」

一真(かずま)が手をぶんぶん振りながら俺に向かって走ってくる。
「あ、一真おはよ」
俺に追いつくと背中をばしっと叩いてきた。

「はっはっは！なんだ涼介―！
子供は学校に連れて行っちゃいけないんだぞ」
相変わらずのテンションでけらけら笑っている。

ん？ちょっと待て、今こいつ・・・・

「あれ？」
急に一真の顔からすっと笑顔が消える。

「あ・・・やべ、間違えた・・・」
「え、どうしたかず・・・」
「ごめん！今の気にしないで！
俺実は霊感あるとかそんなんじゃないからね！」

慌てた様子で両手を振り、また笑顔に戻ると走り出した。
「教室で会おう！」
「待て待てごまかすなー！！」
俊足で走り去っていく。

今あいつ・・・
「完全にわしを見ていたな」
「やっぱり？」
なんだか額を嫌な汗が流れ落ちた。

「お前、霊感あるやつには見えちゃうの？」
「まぁあんな低能なやつらと一緒にされたくないが、
部類は幽霊みたいなもんかのう」
「それって意外と見える人多いんじゃ・・・」
「わしは目が合ったやつは初めてじゃ。
さっきの男はなかなか強い霊感の持ち主なんじゃろう」
「一真がそんな・・・今まで聞いたことねえよ」

「お前、人のコンプレックスを探るなんて最低じゃな」
「え、いやそんなつもりは」

・・・そうか、知られたくなかったのか。
とりあえず俺は、座敷童の存在に気付いてないふりを通そうと思った。

さっそく新学期、ひとつの不安が生まれた。

「まぁ、思い詰めるな涼介」
座敷童が後ろから耳たぶをぐいぐい引っ張る。
「・・・決めた」
「ん？」
俺はぐるっと首だけ座敷童に向け言い放った。

「わらし！呼び方、わらし！決定！」
「ふざけるなカス野郎！！」

そしてとうとう俺は、学校についてしまった。

4、新学期のあのテンション

学校につくと新しい教室目指して
廊下を進んでいく。

みんな新しい高校生活に心が弾むのだろう。
がやがやと賑やかだった。

教室に入ると自分の席を探した。
入って2列目の一番後ろだ。
なかなかいい場所なんじゃない？

荷物を置き教室をぐるりと見渡すと、
窓側の前の方に一真がいた。
そして左斜め前の席には
見覚えのある栗色のセミロング。
美歩(みほ)ちゃんだ！

惜しい、あと一人！

でも一番見ていられる場所でもあるし、ラッキーかも・・・

なんて妄想を膨らましていると、
気配に気づいたのか美歩ちゃんが振り向いた。
いきなりのことで高鳴る俺の胸の鼓動。

あ、今にこってした！

俺もすかさず軽く手をあげ挨拶をする。
片思いとはいえ中学が同じだったのだから
もちろん顔見知りだ。
挨拶くらいならできる。
あまり話したことはないけど・・・

まさに天使の笑顔だった。

美歩ちゃんが前に向き直っても
俺はまだ余韻にひたっていた。

ぱっちりとした二重。
ふんわりとした笑顔の中に
見え隠れする少女らしさ。

まさに俺のオアシス・・・・！

「うわ、なんじゃその気持ち悪い顔」

一気に現実に引き戻された。
完全に鼻の下がのびていたらしい。

「い、いや別に・・・」

「先ほどこちらを向いた可愛らしい少女、
あの子が美歩ちゃんかの」

「えっ？」
なぜこいつが名前を・・・

「ふん、半年も見てればバレバレじゃわい、この若僧め」
「5歳児に言われたくない」
冷めた目で座敷童を見下ろす。
「ほれ、独り言は変人への第一歩じゃよ」
「この・・・・っ！」

くっくっくと嫌らしい笑いをしているおかっぱ頭を思い切り殴りたかったが、
確かにまたまわりに変な目で見られるのは勘弁したかったので、
俺はぐっと感情をこらえた。

「あの、ごめん、もうちょっと下がってもらえる？」
突然声をかけられ驚き顔を上げる。
「あ、ごめん」
俺は少し机を後ろに下げた。
少しワックスでいじられた黒髪に、スクエア型の黒縁眼鏡。
その奥にはクールな瞳。整った顔立ち、いわゆるイケメン。
どうやらこいつが俺の前の席の人物らしい。

こんなできあがったやつもいるんだなーと
後姿を眺めていると、予鈴が鳴り響く。

「はい、皆さんおはようございまーす」
中年男の教師が教卓に立つ。
入学式は先日のクラス発表の時に終わっていたので、
今日の予定はホームルームの後に授業が始まる。
担任の自己紹介が始まった。

「えー、本日よりこのクラスの担任になりました、
本田祥司（ほんだしょうじ）と言います、どうぞよろしく」
ありきたりの名前にありきたりのルックス。
丸顔の中年男だ。

頭の毛は明らかにヅラであろう雰囲気をかもしだしている。
配布物が一通り終わると、個人の自己紹介が始まった。
「名前と一言ね、好きなものとか入部予定の部活とかでいいから。
名簿1番から順番にいこうか。はい、じゃあ青木さーん」
照れくさそうに一番前の坊主の男が立ちあがった。
「えーっと、青木優(あおきゆう)でーす。
野球部入ります！どうぞよろしくー」

そんな感じに順番にすすんでいく。
俺はそれらをなんとなく聞き流していた。
早く自分の番を終わらせて美歩ちゃんの声を聞きたいなあ。

なんてことを考えていると、気づけば前の男の番がきた。
そいつがだるそうに立ちあがると、
急に女子のひそひそ声が大きくなったような気がする。
まぁ、男が見ても一瞬釘付けになった顔立ちだ、無理もない。
俺はちょっと美歩ちゃんの反応が気になりちらっと目をむけた。

やはり隣の席の女子と何か話していた。
いいけどね、予想範囲内のことですよ。

「風間昶(かざまあきら)。陸上部入部予定、どうぞよろしく」

簡潔にまとめ、軽くぺこっとお辞儀をすると席に着いた。

今、陸上部って単語が耳に入ったんだが。
いや、気のせいじゃない。
意外な発言に驚き、戸惑っていたが
自分の頭を整理している時間はなかった。
座敷童がとなりから俺の制服を引っ張っている。
「おい、涼介。お前の番じゃぞ」
「あ、あぁ」

俺はがたっと席を立つ。
「加藤涼介(かとうりょうすけ)です。
・・・えっと、陸上部希望。
よろしくお願いしまーす」

風間昶がぴくっと俺の自己紹介に反応する。
直後に同じ部活名を口にするほど恥ずかしいものはない。
そしてさらに意外なことに・・・

「ほーう、風間も加藤も陸上部か！
顧問俺だからさ、よろしくなー」

まさかの担任が顧問！！
あのヅラ頭運動できるのか？！

俺は心の中でシャウトする。
本田はにこにこと愛想のある笑顔をこちらに向けている。
俺は戸惑いながらも片方の口角を上げて笑いかえしてみた。
風間昶がどんな表情をしているのかとても気になる。

一真の方をちらっと見ると、
あいつも案の定口をぽかーんと開けて本田を見ていた。

俺が席に着くとまた自己紹介は再開。
隣で座敷童も楽しそうにこにこしながら聞いていた。

いよいよ美歩ちゃんの番がきた！
少し恥ずかしそうに席を立つ。

「佐々木美歩（ささきみほ）です。
早くクラスのみんなと仲良くなれたらいいと思います。
よろしくお願いします」

後ろにいるせいで顔が見えない。
でも可愛い声だけで俺の胸は十分に満たされた。
やばい、これは他の男も惚れるな。

俺がしばらく美歩ちゃんの余韻にひたっていると、
また注目せざる得ない言葉が耳に入ってきた。

「田辺千夏（たなべちなつ）です！
陸上部入ります、本田先生お世話になりまーす！」

俺を含め三人目の陸上部入部希望者。
何、そんなに人気あるのかここの陸上部？

やけに元気はつらつとした女の子。
その子が席に着くと改めて田辺千夏を見た。
美歩ちゃんの隣の席だ。

前髪は長さがきれいにそろっていて、
前下がりのショートカット。
遠くからでもわかる目力、猫って感じだ。

気づけば一真の番だ。
窓側の一番前の席。

「長谷川一真（はせがわかずま）。
陸上部希望、友達も彼女も募集中！よろしくー」
元気なあいつらしい自己紹介だ。

「このクラスは４人も陸上部希望者がいるのか！
顧問としては嬉しい限りだねー」

また本田がにこにこしていた。

その後も順調に進み、最後のひとりまで終わると
また本田が仕切りなおす。
「春は出会いの季節、いいクラスにしていこうなー。
はい、じゃあ提出物配りまーす。
これ受け取った人から次の授業の準備に入ってね」
ちょうど良いタイミングで授業終了の予鈴が鳴った。

配布物が前から順番にまわってくる。
風間昶が振り向き、俺に配布物を渡すとじっと顔を見てきた。
「お前も陸上部なのか」
まさかむこうから話しかけてくれるとは。
「あぁ、中学でやっててさ。よろしくな、風間」
「よろしく、昶でいいから」

笑い方もとってもクール。
なんか性格もよさそうな感じだ。
こいつなら仲良くやっていけるかも。

こんなイケメンな友達ができるなんて、
まさかこれも座敷童効果か？
そう思いちらっと座敷童に目を向けると、
座敷童はふるふると首を横に振った。
こいつ、俺の心読めるのか？

「偶然じゃ」

ですよね
「つかこいつ、わしの好みじゃないし」
聞いてないです！

すると生物の授業の用意をした一真が俺達の元にやってきた。

「次の生物移動だってさ！」
「おう、一真」
「えっと・・・」
昶が一真に顔を向ける。

「こいつ一真。俺たち幼なじみでさ」

「なになに？2人とももう仲良くなったの？
俺も陸上部仲間だから、よろしく！！
一真って呼んで。俺も昶って呼ぶから」

一真は満面の笑みを昶にむけた。
昶はくすっと笑った。

「子犬みたい」

昶の目が一瞬危ない雰囲気を
放ったように見えたのは気のせいだろうか。

「なにそれー」
ははははっと一真は笑っているし
俺の考えすぎだろう。

「ほら、2人も早く準備しなよ。
一緒に生物教室行こう・・・ぜ」

いきなり一真の視線が俺の横で止まった。
明らかに座敷童を見ている。
座敷童の方も無表情で
一真を見つめ返している。

「まだ居やがったか」
眉をぴくぴくさせながら
一真がぼそっとつぶやいた。
やっぱりこいつ見えてるな。

「何か言ったか？一真」

「いや！？何も？」
やはり気づかれたくないのか動揺している。
俺はとりあえず気づいていないふりを通した。

「さ、行こ行こ！
遅れちゃうぞ！」

一真に急かされ、俺も昶も席を立ち、
3人で生物教室を目指した。

行くまでの廊下では
陸上が話題になった。

「明日みんなで放課後、
グラウンドに陸上部見学行こうよ！」

提案したのは一真だ。

いいねーと俺と昶もすぐ賛成。
ジャージとシューズも持ってこよう、など
次々話が弾む。
座敷童は退屈そうに
俺の頭に乗っていた。

時折一真の視線を感じたが、
いい加減慣れてきた。

「それにしても、昶ほんと綺麗な顔だよな」

生物教室につくと、
一真がまじまじと昶を眺めた。
「どうも。一真も可愛い顔してるよ」

「可愛い？」
思わず俺が聞き返した。
「まあ確かに犬っぽいよなこいつ」

「嬉しくないよ、可愛いなんてー。
かなりモテるでしょ？」
「いや、別に」
「またまたー」
俺と一真はへらへら笑う。
「どうせなら二次元みたいな
女の子にモテたいよね」
「またまたー」

・・・・ん？

「そこらのアイドルくらいの子なら
相手してやってもいいけどさ」
「またまたー」

・・・・あれ、またちょっと気になる発言。

「男でも可愛かったらいいと思うし、
女はロリやドMに限るねー。
どうせS気取るなら女王様気質なやつ虐めたおしたくなるもんじゃない？」

くすっと優しい笑顔。

訂正します、真っ黒な笑顔。

さすがの一真も違和感に気づいたらしく
笑顔がひきつっている。

「あはは、昶すげーS発言」

「あはは、実は俺様体質だろー」

俺と一真は冷や汗垂らしながら
笑い飛ばした。

だが昶は俺たちの努力を
冷ややかな笑顔で吹き飛ばした。

「俺だし？」

にこっと笑顔。
少し首を右に傾げる仕草。

これには俺と一真も思わずフリーズ。
ヒヤッとした違和感。
笑い飛ばせない雰囲気。

座敷童は俺の上でにやにやしている。

すると予鈴がなり、
白衣をまとった女教師が入ってきた。
号令がかけられる。

「あ、始まる。一真、席戻った方がいいぞ」

昶が何くわぬ顔で口を開いた。
俺と一真も我に返る。
「あ、うん。じゃあまた」

慌てて席に行く一真。

礼をして授業が始まる。

女教師が自己紹介をしている間
目の前の黒髪を見つめながら
俺はやっと自分の脳内を
整理することができた。

高校で初めてできたお友達。

そのイケメンは、
どうやらナルシストの変態のようです。

5、普通は意外と珍しい

キーンコーン　カーンコーン

1日の学校を締めくくるチャイムが鳴り響く。
俺は帰る準備を終えて、
玄関で靴をはきかえていた。

「高校とはなかなか愉快なところじゃのう。
ただ授業が長くて眠くなるわい」

隣で座敷童がぐーっと伸びをしている。
確かに子供には疲れるところだろう。

「おい涼介（りょうすけ）、今わしのことを子供とか思ったじゃろ」

ぎろっと俺をにらむ視線が痛い。
そうか、こいつ心読めるんだっけ。
今日学んだ唯一の座敷童情報だ。

「じゃあ声出さなくても会話できるじゃん」
俺は思わずぼそっと呟く。
「それは少し違うぞ涼介！」
歩き出した俺に、座敷童は慌てて付いてきた。

「心を読むとき、わしらの頭には
お前の心はイメージで流れ込むのじゃ。
じゃから正確に言葉を交わすのとは違う」

腰に手を当てて偉そうに説明している。

「お前達が仏壇に向かって無言で
拝んでいるのを先祖は受け取るじゃろ？
わしらのもそれに近いといって良いかのう」

「ふーん…」

またまわりに変な目を
向けられたくなかったので、
俺は極力言葉を返さないように努めた。

「おーい！りょーすけぇー！！」

その時後ろから聞き慣れた声と
バタバタ足音が聞こえてきた。
一真(かずま)だ。

朝のように俺に追いつくと
足を止め荒い息を整える。
「大丈夫か、一真…」

「い、一緒に帰ろ！」
汗だくの満面の笑顔をむけられる。
くせ毛がふわっとはね上がった。

「あぁ…つーか言ってくれれば待ってたのに」

「いや、いいのいいの」

俺と一真は並んで歩き出す。
途中までは方向が同じだ。
座敷童もてくてく俺の隣を歩いている。

「いやそれにしてもさ、昶って意外というかさー。
人は見かけによらないよなー」

「いやむしろ見た目そのものなんじゃ…」

なんだか一真の話し方が
いつもより不自然に感じる。
視線が相変わらず座敷童に
ちらちら向いているからだろうか。
何度も何か言いたそうな顔を俺に向けている。

とうの座敷童はというと、
一真と何度も目を合わせてはいるが
一言も口を開かない。

いい加減じれったいな…

「おい、一真」
「ん！？」

びくっとわかりやすい反応。

「お前、さっきからなんか俺に
　言いたいことあるんじゃないの？」

「え？えーっと…」

「なんかお前変なんだよ。
何年一緒にいると思ってんだ？
俺がお前の違和感に気づかないわけないだろ」

「涼介……」

すると突然、一真は足を止めた。
俺も立ち止まり一真に向き合う。

大丈夫、俺の心の準備はできていた。
たとえ一真が霊感抜群な不思議少年だろうと
受け入れるに決まっている。

「……驚く、だろうけど」
「あぁ」
「ど、どん引きするかもしれないんだけど……！」
「あぁ」
「実は俺……」
さぁこい！

「子犬って言われたの、
ちょっと嬉しかったんだよね」

……は？

「え…っと…」

「あ！ほら昶にさ、言われたじゃん？
ちょっと喜んでる自分が…」
「それじゃないだろ！！！」

トラックが俺たちの隣をブーンと走りさった。
俺はまさに開いた口が塞がらない状態。

なにさっきのくだり。

あんだけためてじらしてこの落ちはないだろう。

改めて大きなため息をつく。
一真に言う気がないなら仕方がない。
もう一度、戸惑う一真に目を向けた。

「いや、いい…帰ろう」

俺は背を向け歩き出す。

「なんじゃ、つまらんのう」

座敷童も期待はずれの出来事だったのか
ふいっと一真を置いて俺についてきた。

「ちょ、涼介っ！」

ぐいっ

「……ッ！！」

いきなり一真に腕を捕まれた。
俺は思わず立ち止まり、
驚いた目で一真を見る。

「かず……っ」

「違うんだ、俺が言いたいのはそれじゃなくて…」

言葉を探すかのように、口をぱくぱくさせている。

「……その…」

俺は黙って言葉をまつ。
一真の目は座敷童に向けられた後、
再び俺にむけられる。
その瞳からは迷いの色が消えていた。

「……俺、幽霊見えるんだ」

5、普通は意外と珍しい（後書き）

短いのは気分です、すみません。
以前に評価して下さった方
ありがとうございます！
読んでくれた方がいることに感動です！
なかなか書く時間がなくて不定期更新ですが
よろしくお願いします。

6、おかっぱの本音

親友の突然の告白。
いや、誘導告白と言うのだろうか。
１０年近くの付き合いになる親友が、
初めて勇気を出して打ち明けてくれたこと。

それは、幽霊が見えること。

「・・・・驚かないの？」
「いや、驚いてるさ」

半分嘘だ。
だって朝から気づいて心の準備をしてたから。

「俺、ちょっと珍しいらしくて・・・・
見えるだけじゃなくて、触れちゃう、話せちゃう
その気になれば知ってる霊は呼べちゃうみたいな・・」

「まじか！」

今は本当に驚いています。
予想をはるかに上回る展開。
そんなアニメの主人公体質な奴が
こんな近くにいたなんて。

「それでっ！本当に言いにくいんだけど・・・
実は朝から涼介（りょうすけ）に男の子の霊が取り付いているんだ！！」

一真はビシッと座敷童を指差し語尾を強める。

「なっなんじゃと！
わしをあんな低能な幽霊なんかと一緒にするな！」

座敷童は小さな拳を突き上げわめいているが、
一真は無視して話し続ける。

「でも安心して！ずっと見てたけど悪霊ではなさそうだし、
なにより可愛い！！」

ぴたっと座敷童の抵抗がとまる。
「ほーう、わしの可愛いさが分かるなんて
どっかのもやしとは大違いじゃ」

にたにたと横目で俺のことをみている。
一真(かずま)め、無意識だろうがさっそくこいつから
好感度を勝ち取りやがった。

俺は座敷童を睨み返してから一真に視線を戻した。
興奮して顔が少し赤くなっている。
「お、俺、いい霊媒師知ってるから・・・！」

「一真」

俺は優しく微笑みかけた。

「ありがとう。実はこのおかっぱ、俺にも見えるんだ」
「えっ？！」

気持ちいいくらいの驚いた表情。
うん、いい反応だ。

「まさか、涼介も・・・」
「いや、違う、ちょっと待て」
俺は慌てて手のひらを前に出し一真の言葉を止める。

「話すと長くなる」
まぁ、こいつが来てまだ1日しかたってないけどさ。

一真は驚いた表情のまま固まっている。
当然の反応だろう。

「なんじゃ、言ってしまうのか涼介」
こちらにも驚いているやつがもう1人。
会話している俺たちを見て更に驚く一真。

「とりあえず、家にこいよ」

俺は満面の笑顔で言い放った。

――――――――――――――――――――――――

俺は一真を自分の部屋にあげると、麦茶を2杯用意して部屋に戻った。
一真は早くも座敷童と打ち解けたらしく、
俺がドアを開けた時には、すでに質問タイムが始まっていた。

「へぇー！じゃあざー君は涼介のおばあちゃんのところから来たんだ！」

「そうじゃ。トメさんは優しくて暖かいお方じゃったわい」

座敷童はベッドの上で胡座(あぐら)をかき、偉そうに腕組みをしていた。
一真はフローリングの上に敷かれたカーペットの上で、
瞳をきらきらさせて座敷童を見上げている。

「おい、一真。こいつざー君なんてキャラじゃないぞ」

俺はにやにやしながら一真に麦茶を差し出した。

「あ、ありがとう。・・・でもざー君て呼べって」
「こんなの、わらしで十分だ」
「何を言うか涼介！
お前少しは素直な一真を見習ったらどうじゃ！」

座敷童がギャーギャー吠えている。

「わらしなんて可愛そうだよ。せめて・・・」

んーっと一真は考え込む。
俺と座敷童が黙って言葉を待つと、突然ひらめいたようにポンッと
手を打った。

「ざきわら！」

「ザキヤマみたいに言うな」
思わず俺はつっこむ。
「ざしわら？」
「いやじゃ！」
本人からの拒否反応。
再び一真はうーんと唸りながら考え込んだ。

その時、俺はいい考えを思いついた。
「そういや、わらし。お前ビー玉の話したとき、
前世で強い思い入れのあったものって言ってたよな」
「あぁ、言ったぞ」
「つまり、お前には前世があったんだ」
「当たり前じゃ。お前、バカじゃろ」
俺は少しいらっとしたが話を続けた。
「じゃあさ、前世の名前でいいじゃん。
それなら文句ないだろ？」
「おー！涼介ナイスアイディア！」
一真と俺は座敷童に顔をむけた。
ぽかーんとした表情をしている。

・・・・あれ？
「おい、どうなんだよ」
「あぁ、それは無理じゃ」

あっさりとした返答。
「えっ！？なんで？」
一真も食らいつく。
座敷童は腕を組み、うーんと悩んだそぶりを見せると、
不安そうな顔で俺と一真を交互に見た。
「お前らに話したところで、
どうせ無駄だと思ったから言わなかったのじゃが・・・」
「何もったいぶってんだよ」
「なにか問題でもあるの？」
座敷童は少しうつむいて話し始めた。
「・・・座敷童にとって、前世の名を得ることは、
この世から解放される鍵となるんじゃ。
その名で呼ばれたとたん、契約は解除される。
つまり、成仏できるんじゃ」
「えっ？」
思わず驚きの声がもれた。
「じゃあ・・・その後はもう、ざー君に会えないの？」
一真が寂しそうに問いかけた。
「そういうことじゃ」
三人の間に沈黙が流れる。
部屋は緊張感につつまれていた。

「・・・さっき、俺たちに話しても無駄だと言ったな」
俺は思い切って話を切り出した。
真面目な顔で座敷童を見つめる。

「お前、成仏したいんだな？」

俺ははっきりと言い放った。

7、変な親友と変な俺

座敷童はうつむいた。

「・・・違う、と言えば嘘になる」

その声はいつもの毒舌ぶりからは想像できないような、細い声だった。

座敷童は目を伏せたまま話し続ける。

「この世は楽しい。何百年も、移り変わる世の中を見てきた。
これからもどこまで変化していくのか、見てみたいと思うしのう・・・

ただのぅ・・・」

座敷童はいつの間にやら正座していた。
小さな握り拳で、着物の裾をキュッと握っている。

「―・・・母(かか)に、会いたいのじゃ」

「母さん?」

そうか、こいつのお母さんはもう亡くなっているんだ。
死んでから親に会えないで、この世にとどめられているなんて・・・

俺は座敷童が可愛そうに見えてきた。
「お前、ずっと寂しい思いを・・・」
「だからじゃ、涼介(りょうすけ)!
わしにビー玉の所有権を譲って自由にしてくれ!」
「えっ?!」
「そうだよ涼介!
ざー君自由にしてやれよ!」「ちょ、ちょっと・・・」

座敷童と一真(かずま)が2人して俺に泣きついてきた。
待て待て待て!!!

「俺は騙されないぞ!
所有権譲ったところで成仏するわけじゃないんだから、
それとこれは話が別だろ!」
しがみついてくる2人を全力で引き離す。
「えっ?そうなの?」
「一真、話聞いてただろ!」

「―・・・ッチ」
「おい、わらし！舌打ち聞こえてるぞ！」

一真はポカーンとした顔で俺を見上げ、
座敷童はさっきの涙はどこへ行ったのか、
眉間にしわを寄せ睨んでいる。

「ただお前の気持ちはよくわかった。
協力してやろうじゃないの」
「なんじゃと？」

「名前、探してやるって言ってんの」
にっと笑いながら座敷童を見下ろす。

「そうこなくっちゃ、涼介！
俺も協力するよ！」

一真も乗り気で笑っている。

しかしそんな俺たちとは裏腹に、座敷童は不安そうな顔をしていた。

「む、無理じゃ！そんな簡単に言うな！」

「まぁ偶然分かったらラッキーじゃん」

「じゃが・・・」

「無理だと思うなら、お前が期待しなければいい。

俺の退屈しのぎだ」

座敷童はまだ何か言いたげな様子だったが、
最後には肩を落としてため息混じりにつぶやいた。

「好きにするがよい。わしの役目は見守る事じゃ」

「ざー君素直じゃないなあ」

一真が笑顔で座敷童の頭を撫でた。

「触るなモブ」

「モブ？！」

座敷童の冷ややかな視線にひるむ一真。
うん、どうやらわらしはツンデレだ。

少し頬が赤らんでいる。

俺は落ち込んでいる一真に話題を移すことにした。

「それにしても、お前がそんなすげーこと隠してたなんてなー」

「え？あー・・・」
いきなり話をふったせいで驚いたらしい。
頭をぽりぽり掻きながら、目はフローリングの上を泳いでいる。

「母さんにさ、誰にも言うなって言われてたんだ・・・」
一真はゆっくり話を始めた。
「かなり幼いころから見えていたみたいでさ。
何もないところに向かって指さして、アーアー喋ってたって。
他の人に不審な目で見られたりしてて、
こんなんだと外で友達ができるか心配だからって、
絶対にお外では喋っちゃダメよーって言われてたんだ」
一真はハハっと苦笑いをした。
「・・・俺、変でしょ。涼介は親友だから、絶対嫌われたくなかったから・・・」

目がチラッと俺の様子を伺う。

「一番知られたくなかったんだけどなー・・・」

また苦笑い。

俺はフーっと息をはき、腕を組んで一真を見た。
「俺の知ってるお前は、元から変だ」

「なっ？！」

一真は酷い！と言わんばかりの
愕然とした顔をになった。

「涼介、そんな言い方っ・・・」

「何年一緒にいると思ってんだ。
お前が今更どんなビックリ人間でも、
嫌いになるわけないだろ」

「・・・涼介！」

「元からウザイんだから」

一瞬の輝かしい表情が、また愕然とした表情に戻った。

俺は思わず吹き出す。

「くっ、ははは！何その顔！」「だ、だって涼介が！」
「冗談だよ、ジョーダン」

涙目で俺を見る一真を笑いながらたしなめる。

「気にするなって言ってんの」
そして座敷童に目を向けた。

話に飽きて眠たいのか、うとうとしている。

「俺も変な仲間だ」

にひひっと歯を出して笑ったら、
一真も同じように笑い返してくれた。

「うん、知ってる！」

・・・この笑顔は悪意無しで言っているのだろうか。
一真に言われるとなんかイラっとする。

「本当にありがとう」

照れくさそうな感謝の言葉は、真っ直ぐ俺に入ってきた。

「なんかあったら、いつでも言ってよ。
ざー君の名前探し手伝う」
「ありがとう。こんなの一真じゃないと頼れないからな」

俺たちは笑いあった。
その頃座敷童はと言うと、
ベッドの上で小さく体を丸め眠っていた。

俺の部屋には、並外れた霊力少年に座敷童。
なんだかおもしろいことが、またひとつ増えたように思った。

8、美女と野獣と時々わらし

今日は学校が始まって、2回目の登校日だ。
とても長い2日間だったような気がする。
座敷童が来て、1日の密度が以前より濃く感じるからだろうか？

今朝も座敷童にたたき起こされ学校に来た。
まだ馴染まない教室で授業を受ける。
そしてあっという間に昼休みになった。
新学期の学校は本当に時間が早く感じられる。

一真（かずま）が弁当を持って俺の席にやって来た。
昶（あきら）も後ろを向き、3人で昼食を食べ始める。

「わー！昶の弁当うまそう！」
一真が昶の弁当を覗き込みながら叫んだ。
俺も一緒に覗き込む。
きれいに焼けている卵焼きにソーセージ。
野菜も入っていて彩りも鮮やかだ。
「ほんと、うっまそーう」

「あー、これ自作」
「え！？料理できんの？」
「それなりに」
「すげー！」

こういう奴をできすぎ君と言うのだろうか。
一方座敷童は無関心のようで、
俺の母作弁当のハンバーグを幸せそうに頬張っていた。

たわいもない会話をしながら食べていると、次第に廊下が賑やかになってきた。
上級生の顔がチラチラ見える。

「何の騒ぎだろ？」
「今日から部活動勧誘が始まったみたい」
一真が箸で廊下を指す。
「ほら」

なるほど。確かに制服の生徒の中に、
道着やジャージを着ている生徒が紛れているのがわかる。

「柔道部よろしくお願いしまーす！！！」

「俺、あーゆうの嫌い」

威勢の良い声を尻目に、昶がそう言って卵焼きを口に入れた。
「熱くなってる体育会系って無理」
「そーゆう昶も体育会系希望じゃん」
一真がご飯をかき込みながらつっこんだ。

「熱血はヤなの。俺クールに走りたいから」
「そういや、専門種目聞いてなかったな。
昶は何やるんだ？」

口元に笑みを浮かべながら、昶の視線が俺に向けられる。
「初めの部活動集会までお楽しみ」
その瞬間、眼鏡の奥の瞳が輝いたような気がした。

食事を終えた頃、教室はいっそう賑やかになっていた。
多くの生徒が出入り口を行き交う中、一際目を引く美女が入ってきた。
明るい栗色で巻き毛のロングヘアー。
ブラウスからは谷間が覗いており、目を向けずにはいられない。
制服の上からでもEカップは推測できる、ボン、キュッとしたナイスバディだ。
「ね、君ぃ。もう部活決まってたりするー？」
甘い声で近くにいた男子生徒に声をかけている。

「なんか、すげぇ姉さん入ってきたぞ」
一真と昶もすでに見とれていたらしく、すぐに頷いた。
「制服姿が犯罪だな」
「ダンス部？あ、キャバクラ部？」
「一真、キャバクラ部なんてあるわけないだろ」
「・・・虐めてみてー」
「昶、早まるな」

すると美女の後ろから、体格の良い男がぬっと教室に入ってきた。
顔立ちはまさに肉食系イケメン。
キリッとした眉にギンギンとした目つき。
髪は後ろに流されツンツンたっている。
１８０センチメートル以上あるだろう長身に逆三角形の体つき。
そのため教室の入り口が小さく見えた。

教室の女子の声が、心なしか大きくなった気がする。

「うわ！でかい人入ってきた！しかもイケメン」
一真が真っ先に声を出した。
「ラグビー部？」
「見るからに俺の苦手なタイプ」
「わしはあんなたくましい男になりたいがのう」

突然座敷童が会話に入ってきた。
だがもちろん聞こえているのは俺と一真だけで、昶には聞こえていない。

「ざー君のお墨付きなら・・・・」
「おい一真！」

一真は俺のあわてた声にはっとなる。
良かった、昶は何も気づいていないようだ。

「サクラ！収穫あったか？」

でかい美男子が大きな声で先に来ていた美女に話しかけた。
声も迫力がある。

って、それより俺が驚いたのは2人が同じ部活だということだ。

「まじでか」
俺がぼそっと呟くと一真も昶も頷いた。
一真がごくりとつばを飲み込む。

「この学校、ホストとキャバクラあんのか」

「待て待て」

俺はすかさず一真を止める。
その時、美女とはっと目があった。
くすっといたずらな笑みを浮かべてこちらへ歩いてきた。

「やっほー。ねぇ君たちぃ～」
ヤバい。逃げられない。
俺は一真と昶に視線を送る。
2人とも諦めの表情を返してきた。

先ほど「サクラ」と呼ばれた美女が、
少し腰をかがめて俺たちに微笑んだ。

ちょ、谷間っ・・・！

「ねぇねぇ！もう部活とか決まってる～？」

「あ・・まぁ・・・」

俺はどぎまぎしながら答えた。
「やーん！君、子犬みたいに可愛いわね！
こっちの彼は眼鏡のイケメン！
私超タイプかもー！」

おい、俺を無視するな。

のどまででかかった言葉を、
上級生であったことを思い出しのみ込んだ。
隣で座敷童が俺を馬鹿にしたように笑っているが、
気づかないフリをしよう。

「俺たちもう決まってるんで勧誘ならお断りします」

昶が真面目に言い切った。
こいつしっかりしてんなぁ・・・

「えー！残念ね。
まぁ基本的にグランドで活動してるからさ、
興味あったら見に来てよ。
陸上部よろしくーう」

美女は俺たちにウィンクをすると、軽く手を振り去っていった。

・・・ん？陸上部？

「あの人、陸上部って言った？」

恐る恐る一真と昶に訪ねる。
わ、２人共青ざめた顔・・・

「ま、まっさかー！」

「でも、間違いなく言ったぞ。陸上部って」

一真の大げさな笑いを
昶が冷静に否定した。

もう一度振り返ったが、
もう先ほどの美女とイケメンの姿は
見あたらなかった。

どんな陸上部なのかな。

とりあえず、来週の部活動集会が楽しみだ。

8、美女と野獣と時々わらし（後書き）

短いながらも久々の更新です。
私情の忙しい時期が過ぎたので、
また更新頑張りたいと思います。
今後も不定期な時もあると思いますが、
よろしくお願いします！

9、人は見た目によらず

「・・・あ、１００円みっけ」

今日も小銭を見つけてちょっとついてる俺。

「わしから溢れる幸運パワーのおかげじゃな！」

座敷童が相変わらず偉そうに腰に手を当て威張ったポーズをとる。

今はちょうど最後の授業が終わったところ。

俺はジュースを買うために自販機の前に立っていた。

目当てのジュースを買い、教室に戻ろうと廊下を曲がる。

その時だった。

「っわ！！」「きゃっ！！！」

どかっと誰かとぶつかった。勢いよく廊下に尻餅をつく。

い、いてぇ・・・・

っと、ぶつかってしまった相手を確認。

やべ、上級生だ・・・

いやそれより

超美人な女子生徒！！

「すみません！大丈夫ですか？」

俺は慌てて立ち上がり手を差し出す。

ショートカットでめちゃくちゃ小顔。
こんな美人とぶつかっちゃうなんて

やっぱり俺ついてる・・・！

「・・・大丈夫」

そう冷めた声で呟くと、俺の手を無視して立ち上がった。

おかげさまで、俺の沸騰していた脳内は一気に正常化。

すらっと細身で背が高い。
俺が１７４ｃｍだから・・・
１６５ｃｍ以上あるんじゃないか？

「あ、す、すみません」
「いいから、どいて」
「・・・・」

あまりに冷めた表情に、何も言えない俺。

うわ、俺ってばチキン野郎！
なんて思っているとその女子生徒は俺の横を通り、
すたすたと去ってしまった。

「自分でチキンを認めるとは立派じゃな」

「・・・うるせぇ」
座敷童に笑われながら、俺は教室に戻った。
教室に入ると、一真（かずま）と昶（あきら）が俺を待っていた。
「おせぇよ涼介（りょうすけ）！これから部活見に行くんだろ！」
「さっさと準備しろ」
「ごめんごめん、ちょっとハプニングがな」
そう、今日はこれから三人で陸上部を見学に行く。
入るとは決めているものの、
やはり実際にどんな雰囲気で活動しているのか見ておきたいものだ。
「よし、行くか！」
俺の準備が終わると、早速グラウンドに向かった。
多くの部活動が、始める準備を行っている。
俺達みたいに見学に来ている生徒も大勢いて、
グラウンドはなかなか賑わっていた。
その中でも、ひときわ人の集まっているところがある。
ひとつは女子の塊で、もうひとつは男子の塊みたいだ。

集団の視線の先にいたのは

昼休みのナイスバディな美女だった。

確か・・・サクラ、さん？

「桜木（さくらぎ）さぁーん！」

「やべぇ、マジ可愛い！」

「こっち見てー！」

1年生男子と思われる集団が、しきりに叫んでいる。

「あの人、桜木っていうんだね」

「・・・すげー人気」

俺は引きつった表情で呟いた。

「みんな来てくれたのね！ありがとーう！」

ジャージ姿の桜木さんが、きゃぴきゃぴと男子に答えている。
あんだけ可愛いきゃ、大半が色仕掛けにはまるのもしょうがないだろう。

「なにこのオスの群れ！？」

「はーい、どいたどいた！
星野ブラザーズのお通りだよーう！」

突然2人の長身の男子が、群れをかき分けてグラウンドに入ってきた。
陸上部のジャージを着ている。
背丈も顔もそっくり。明らかに双子だろう。

ちょ、かなりハンサム・・・・

「きゃー！星野(ほしの)兄弟きたぁ！」
「アップお疲れ様ぁー！」

「蓮(れん)くーん！こっち見てー！」
「珪(けい)くん！タオルどうぞ！！」

双子の登場と同時に、近くの女子の集団が湧き上がる。

凄まじい黄色い声の嵐・・・

「なになにっ！？」

一真が慌てて耳をふさぐ。

「ここの陸上部、レベル高ぇな」

俺も耳をふさぎながら答えた。

「記録はどうだか知らないけどね」

昶も耳をふさぎ、迷惑そうな顔をしている。

双子の明るい茶髪が、太陽でさらにきらきらしている。

「これ、全部サクラ先輩の獲物？」
「相変わらずすごいっすねー」
「こら、珪。獲物とか言わないの」
「俺は蓮ですー」

「おい双子！おめぇら目当ての女共も一緒だろっ」
会話をしている三人の中に昼休み桜木さんと一緒にいた、オールバックのイケメンが入っていくのが見えた。

「サクラ！顔じゃなくて体見て選んで来いっつったろ！」
「あら、ちゃんとこの後吟味するつもりだけど？」
「ちょ、先輩が言うと冗談に聞こえないから」

なんか楽しそうだな・・・

なんて思いながら眺めていると、急に隣で一真が叫んだ。

「あっ！！思い出した！」

「ど、どうした一真？」

「あのでかい先輩、ハンマー持ってるよね？」

確かに、オールバック先輩の片手には
陸上競技のハンマーが握られている。

「昼休み気づかなかったけど、
あの人森岡弘毅（もりおかこうき）さんだよ！」

「・・・誰だっけ？」

「二年前、突如現れたハンマーの新星！
無名の選手がいきなり全国大会で7位入賞。
しかも去年は5位！
新聞や雑誌に取り上げられてたじゃん。
制服姿だと気付かなかったなー」

言われてみれば、そんな記事を読んだ覚えがする。
全国大会の常連人を差し置いて表彰台に登った男。

まさかこの学校の陸上部だったなんて・・・

「俺、他人に興味無いから。
しかも自分の専門種目じゃないし、初耳」

興奮する一真を尻目に、昶がふぅっとため息を漏らした。

「あやつ、そんなにすごいのか？」

いきなり座敷童が、ぴょこっと俺の肩から顔を出した。

「お前、興味あるの？」

「強い男は好きじゃ」

「いや、だから他人には興味ないって」

「あ、昶じゃなくて・・・」

「・・・は？独り言？」

あっぶねー。

こいつの声は周りに聞こえないんだった。

俺は昶に笑ってごまかし、再びグラウンドに目を向けた。

――――――――――――――――――――

陸上部の見学を始めて２０分。

多くの部活動がグラウンドで練習をしていて、
それぞれに見学者も見える。

しかし今、

陸上部を見ているのは俺たち３人（＋見えないおかっぱ１人）だけだった。
先ほどまでの群集が、幻だったかのように見あたらない。

恐らく原因は・・・・・

「ごるあぁぁああ！！珪！ラップ落ちてっぞ！
この周から上げろっつったろうがああ！！

おいこるああ！森岡ああああ！！
誰が休んでいいっつった？
さっさとベンチプレスやりに
トレーニングルーム行きやがれ！！！」

そう

叫んでいる声の主は桜木さん。

ストップウォッチを片手に双子のラップを計りながら、
周りの部員にも声を張り上げている。

・・・まじ別人。

「さ、桜木さんの指導始まったら、
みんなビックリしていなくなったね・・・」

一真が引きつった表情で呟いた。

「・・・あれ見たら、彼女目的で来た奴は入る気無くすよな」

俺も遠い目をして呟いた。

「同感だな」

昶もこくりと頷く。

「・・・あーいうギャップ、嫌いじゃないけどね」

・・・俺はそんな昶のギャップ嫌いじゃないよ、
と、心の中で呟いといた。

それにしても、練習に励む陸上部の人たちの顔は
真剣そのものだった。

女子の集団は、
「星野兄弟の邪魔しちゃだめ！」

と、リーダー格のような女子にまとめられ
撤退していった。

確かにあんな良い顔して走ってる人たちに、
キャーキャー邪魔する気にはならないだろう。

数名は、黙ってフェンス越しに見てるけど。

「おー！お前ら」

突然後ろから声をかけられ、三人同時に振り向いた。

担任の、本田（ほんだ）だ。

あ、この人顧問だったっけ・・・・

「見学か？参加も大歓迎だぞ」

陽気に笑いながら俺たちの横に並ぶ。

黒いジャージに、中年太りの腹がぽんっと目立っている。

「本田先生は指導しないんですか？」

「ん？するぞ？」

おずおずと質問した俺に、
きょとんとした表情を見せる本田。

「ま、桜木に頼りっぱなしだけどな」

またハハハっと陽気に笑う。

それ、何もしてないってことなんじゃ・・・

「あ！本田せーんせい！遅いですよー！
あたしぃー、跳躍組も見に行くんで～
双子のタイム変わってください！」

本田に気づいた桜木さんが、
こちらに向かって手を振り大きな声で叫んだ。

「おーう！じゃ、俺行くな」

そう言って本田はグラウンドの中に走っていく。

・・・今桜木さんのしゃべり方戻ってたよな

「おらおら蓮も落ちてっぞ！
気ぃ抜くんじゃねえ馬鹿やろう！！」

再び怒鳴り声を張り上げる。
凄まじい百面相。
また味のある人に出会ったみたいだ。

「わらしが来てから、まともな人に会わねえな・・・」

「何か言ったか？涼介」

俺の小声の発言に、にやりと座敷童が反応する。

まぁ、いっか。

これなら高校生活も
飽きることなく過ごせそうだ。

「楽しみだな、部活動」

俺の突然の発言に、一真と昶が一緒驚いた表情をする。
しかし、二人ともすぐににっと笑った。

「・・・だな」

「走りたくてウズウズするよ！」

「せっかくジャージあるし、ちょっと走って帰るか？」

「賛成！」

「いいね」

俺たちは着替えをすませると、グラウンドではなく、
学校の近くの公園で走ってから帰ることにした。

俺たちがふざけあいながら走っている間、
座敷童は公園の、タンポポの咲き誇る芝生の上で、
気持ちよさそうに日向ぼっこをしながら眠っていた。

１０、これが僕らの陸上部

新学期が始まり早一週間。
学校の雰囲気にも慣れてきた。

そんな俺、最近女の子に話しかけられまくってます。
同じクラスの子だけでなく、違うクラスの子からも話しかけられたりする。
もちろん、俺は美歩（みほ）ちゃんにしか興味は無いわけで・・・。

「あの・・・」

お、今日も早速声かけられちゃったよ。
この子ちょっと可愛いかも・・・・・・

俺は跳ね上がるテンションを顔に出さないようクールに振り向く。

「ん？なあに？」

目の前には二人の小柄な女の子。
そのうちの一人がもう一人の女の子に背中を押され、
顔を赤らめて一歩前に出た。

「・・・その、アドレス・・・教えてくれませんか？」
ちょっと上目づかいに恥ずかしそうに携帯を取り出す。
いったいこれで何度目だろう。
ついにこんなノーマルな俺にもモテ期到来？
もしやこれも座敷童パワー？
でも駄目だ、俺には大切な美歩ちゃんが・・・・！

「か、風間昶君の！！」

俺は一瞬にして現実に戻される。
ネタばらしをしよう。

俺が最近女の子に声をかけられる理由。
女の子たちの目的はいつも同じ。
全てあの変態眼鏡、昶のアドレスが狙いだ。

「あー・・・・昶？」

「はい！あなたいつも昶君と一緒にいるお友達ですよね？」

「まぁ・・・・」

可愛い子だし、いっか。

ってことで、俺はその女の子にアドレスを教えてあげた。
アドレスを手に入れるや否や、その子はお礼を言うと嬉しそうに去って行った。

座敷童が頭の上からニタニタしながら俺の髪を引っ張っている。

「毎度毎度、ありえない妄想ばかり膨らまして、変態じゃな」
「・・・うるせぇ」
心を読まれるのは厄介だ。

「わしらは人の心を操ることはできないから、
色恋沙汰に関してはわしの力を期待しないことじゃのう」

はいはい、と軽くあしらって俺は教室へ戻った。

席につくと、早速昶が俺に振り向いた。
「・・・おい、涼介（りょうすけ）」
「おう、どうした？」
目つき怖いよ。

「最近、俺知らない女の子からやけにメール来るんだけどさ」
やっぱりそれか。
「モテ期じゃねぇの？」
「そんなの年中だけど」
さりげなく認めるナルシスト君。
「俺が言いたいのはそんなんじゃなくてさ。
犯人お前だろっていうこと」
「あー、ばれてたか」
俺が笑うと昶は「やっぱり」と、ため息をもらした。

「聞かれた覚えのない子からもメールくるから変だと思ったんだ」
「いいじゃん、減るもんじゃないし」

「増やすつもりもないんだよ」
「大丈夫、かわいい子にしか教えてないから」
「お前の基準だと低レベルだってこと」
なんだよ、女の子に聞かれるのは構わないのかよ。
俺は面倒なので素直に謝ることにした。
「悪かった、もう教えないよ」
「ああ、よろしく」
そう言うと昶は前に向き直ったが、
何かを思い出したかのようにすぐまた後ろを振り向いた。
「ロリと巨乳は教えて」
「素直だな変態」
眼鏡をきらっとさせて言い放つと、昶は再び前を向いた。
すると座敷童が隣から俺の制服の裾を引っ張ってきた。
「さっき言ってたことじゃがな」

ん、何か聞いたっけ？

「女子が一真（かずま）よりも涼介に昶のアドを聞くのはわしの力じゃ、感謝しろ」

満面のドヤ顔。

どいつもこいつも、自慢好きな奴らめ！

――――――――――――――――――――

放課後、いよいよ部活動集会の時間がやってきた。

俺と一真と昶は、三人で陸上部の集合する教室を目指す。

ガラッとドアを開けると、すでに上級生の大半が集まっているようだった。

視線が一斉に俺たちの方へ向く。

「きゃー！嬉しい！君たちやっぱり来てくれたんだー！」

さ、桜木(さくらぎ)さん！！
いや相変わらず美しい容姿。

だが俺は先日のすさまじい変貌をちらっと思い出した。

「どうぞどうぞー！もう2年生と3年生は全員集まってるから」
桜木さんの誘導に連れられて席に座らされる俺達。

・・・え？全員？

俺は再び教室内を見渡した。
ざっと１０人いるかいないか・・・

「少ないな」

昶がぼそっと呟いた。

「あ、それ俺も思った」

一真が小声で返事する。
陸上競技部は唯一の男女共同の部活であり、種目も様々だ。
俺と一真の中学時代の陸上部は、２０人以上からできていたため、とても少なく見える。

「俺の中学は３０人以上いたぞ」
「あー、そういや昶の中学って強い先生がいたんだっけ」

ガラガラっ

「ま、間に合った！」

扉が開け、女子が入ってきた。
田辺千夏（たなべちなつ）だ。
そういえば、自己紹介の時に陸上部に入るとか言ってたっけ。
すると、田辺千夏の後ろからもう一人入ってきたのが見えた。

「み、美歩ちゃん！？」

思わず名前を呼んでしまう俺。
だってそこにいるのはまさに俺の天使、美歩ちゃん。

なんで？なんで陸上部？え、これ現実？

「あ、一真君に涼介君」

神様仏様座敷童様！ありがとう！現実です！
好きな子と同じ部活になれるようです！

この際、一真の名前を先に呼んだことは気にしないでおく。

「佐々木が陸上するの！？わー！以外！」
一真がにやにや俺をつついてくる。
やめろ、分かったから。
今俺は自分の脳内を静めるのとキメ顔を保つのに精一杯なんだ。

「きゃー！可愛い！」
「うわ！可愛い子二人もきた！ようこそようこそ！」
4、5人の上級生が二人にわっとたかる。

すると、再びドアが開き、昼休みに教室で見たイケメン先輩と、担任の本田（ほんだ）が入ってきた。
昨日一真が言っていたことが正しければ、たぶんイケメン先輩の名前は森岡弘毅（もりおかこうき）さんだ。

「おらおらてめぇーら、席に着け！」
（たぶん）森岡さんが声を張り上げる。

あ、この人部長なんだ。

全員がそれぞれ席に着くと、（きっと）森岡さんが仕切り始めた。
本田は隣でにこにこ眺めている。
そして本田の隣には桜木さんも立っていた。

「よーし、二年と三年は全員いるな！一年生は・・・これで全員か？」

「もう集会が始まる時間過ぎたから、これで全員ね」
「5人もきたか！あー・・・ゴホン。
一年生の諸君！初めまして。陸上部部長の森岡弘毅だ。
じゃあまず自己紹介してもらうか！」

あ、やっぱり森岡さんだ。
すっげぇ・・・
こんな人が率いる部活で練習できるなんて夢みたいだ。

てか、え？まじ？一年生俺達だけ？
全員同じクラス？
ここの陸上部って人気あるんじゃなくて、
偶然希望者が同じ教室に集まってたってこと？

「・・・予想外」
ぼそっと呟いたのは一真だ。
うん、さすが幼馴染。
考えてることは一緒ってか。

俺達五人は席を立ちあがった。
すると、座敷童が突然タタタっと教卓の前に行った。
どうやら正面から眺めたいらしい。

「じゃあ、前から順番に名前とやりたい種目言ってくれ」

森岡さんに指示され、1番端に座っていた田辺千夏から自己紹介が始まった。

「田辺千夏（たなべちなつ）、幅跳び希望です。一応、中学でもやってました！よろしくお願いしまーす！」

クラスの自己紹介の時もそうだったが、元気がいい。

上級生たちが、よろしくー！可愛いー！などとはやし立てる。

幅跳びかぁ。

かなり小柄な体型なのに、跳躍種目をやるなんて、珍しいと思った。

後で身長聞いてみよう。

「佐々木美歩（ささきみほ）、マネージャー希望です。
陸上初心者ですが精一杯頑張ります」

ぺこっと頭を下げる美歩ちゃんを見て、俺は固まった。

桜木さんを含め、部員たちは相変わらず
ヒューヒューはやし立てているようだったが、
俺の頭の中ではファンファーレが鳴り響いて、そんな音をかき消す。

マ　ネ　ー　ジ　ャ　ー　？

マネージャーってほら、
タオルはいってしたり、ドリンクはいってしたり
頑張れって応援してくれたりするあのマネージャー？

美歩ちゃんがマネージャー！

俺の心は有頂天。

先日の怒鳴り声を上げている桜木さんのマネージャー姿が頭を過ぎったがすぐに消えた。

ジャージで健気に働く美歩ちゃんのマネージャー姿を妄想し、

なんかもう、

いろいろヤバかった。

「―・・・す！短距離希望よろしくお願いします！」

俺が妄想をめぐらせている間に、気づいたら一真の自己紹介がすでに終わっていた。

あ、俺の番だ。

俺はごほん、と喉を整えて一歩前にでる。

「加藤涼介（かとうりょうすけ）、長距離です。よろしくお願いします」

俺がぺこっと頭を下げると、種目が同じで嬉しいのか、昨日見た双子が声を張り上げた。

「ライバル出現ー！」

「ほくろ君よろしく！」

・・・ほくろ君。

俺は愛想笑いを返しておいた。

まぁ特徴それくらいしか無いもんね。

自分が1番分かってるよ。

うわ、座敷童のやつ、爆笑してやがる。

俺がそんな事を考えながら下がると、
最後の昶が一歩前にでた。

なぜかため息をつきながら。

でも、ため息の原因はすぐに分かった。

「風間昶(かざまあきら)。・・・長距離、よろしくお願いします」

昶と種目が一緒だ！

再び双子が声を張る。

「イケメン君も一緒ー！」

「やべ、長距離ファン増えるー！」

よろしくーっと言う双子に
爽やかな笑顔で昶は応えた。

そうか、ライバルか・・・

って言ってもすでに俺は敗北感を感じるのは気のせいだろうか。

顔なんて、陸上に関係ないっての！

内心ではいろいろ叫びつつ、席に座るとともに、
俺は小声で昶に話しかけた。

「へぇ、長距離か。よろしく」

「涼介は短距離かと思ってたんだけどな。

ま、よろしく」

昶は軽く答えると視線を前に戻した。

昶の素っ気ない態度が少し気になったが、
俺も視線を前に戻した。
座敷童がトトトっと俺の元に戻ってくる。
そして何も言わずに俺の机の上に座った。
周りからは見えてないが、邪魔だ。

一年生の自己紹介が終わると、
再び部長の森岡さんがしきり始めた。

本田は相変わらずニコニコと
横で笑っているだけだ。

「顧問は隣にいる、本田祥司(ほんだしょうじ)先生だ。
上級生の紹介はしないから、適当に声かけあって覚えとけ。
あー、マネージャーだけ言っとくか！
こいつ、桜木春奈(さくらぎはるな)。

マネージャー兼指導にも関わってもらってるから、
1番お前らが世話になる人な」

桜木さんが一歩前にでる。

「桜木春奈でーす。
みんなサクラって呼んでね？」

うふっとウインクをかまして
元の立ち位置に戻った。

ほんと、胸元が相変わらずセクシーだ。
ブラウスのボタンを2つ外されていて、
谷間が強調されている。

ルパン何世だかにでてくる
フジコちゃんを連想してしまう。

その後一通り一年間の活動について説明されると、
解散になり、各自がフリー練習を指示された。

ここの陸上部を簡潔にまとめると、

厳しい縛り無し、上下関係も緩く、
基本的に日曜日以外は活動するが、
体調に合わせて休みをとっていいらしい。

仲良く楽しくやろーって双子の星野さんたちは言っていた。
目標も気合いも人それぞれらしい。

まぁ、一言で言うとゆるい。
顧問の本田があれだしなぁ。

ただ俺は前日の練習を見て、
ひとつ確信していることがある。

この部活は強い。

レベルとかよりも、純粋に一人一人が陸上競技を
大好きだというのが伝わってくる。

悪くない環境だと思った。

俺も走るのは好きだけど、
ガツガツ縛られてやりたくはない。

だからちょうど良い。

先輩たちが、ガヤガヤと席を立ち始めた。

俺は教室を出て行く一人一人を目で追った。

・・・男ばっかだな。
森岡さんを除いて5人程度の人数だ。

そしてみんな顔が整っている。
一人だけ、前髪で顔が半分隠れている小柄な人がいたが、
彼以外は男の俺が見てもかっこいいと思ってしまった。

偶然か、学校自体がレベル高いのか、
いや、桜木さんの趣味で集められた可能性も無くはないだろう。

そう言えば、桜木さん以外に女子の先輩を見ていない気がする。

そんな事を考えながら見ていると、
ふと、男子の制服の中に一人だけ、女子の制服が見えた。

背が高くて、髪が短いためか、それまで全く気づかなかった。

その人が教室をでる瞬間、目を凝らして顔を見た。

ほっそりと小顔で白い肌。

冷めた瞳だがどこか品があって、薄い唇で無表情を作っていた。

どっかで見たような・・・？

・・・・あ！

「あっ！！」「おっ」

俺の声と同時に、座敷童も声をだした。

「わらし、あの人っ」

「おぬしがぶつかった少女じゃの」

やっぱり！

廊下でぶつかってしまったあの人だ。
陸上部だったなんて・・・！

突然の俺の大きな声に、
ほぼ全員の視線が俺に集中する

その時、ショートヘアの女子生徒と目があった。

俺は反射的に頭を下げた。

「あ、どうもっ」

「・・・ほくろ君」

・・・・・・・・・・

まぁ、いいや。
あだ名ほくろでも。

「あの時はすみませんでした」

「いいから」

「陸上部だったんですね！」

「・・・・じゃ」

俺の言葉をさらりとかわし、
その先輩は無表情でスタスタと教室を出て行ってしまった。

ひたすら冷たい。

名前すら聞けなかった・・・

一真が興味津々に俺の肩を叩く。
「誰今の美人！涼介知り合い？！」
「まぁ・・・知り合いというか何というか」

「よー、新入り」

突然後ろから声をかけられ、びくっと振り向いた。
そこにいたのは、二年生の双子だった。

・・・なんだろう。
口はにこにこしているのに、目が全く笑っていない。

むしろ、怖い。

「俺、二年の星野蓮（ほしのれん）。長距離だよ、よろしく」

明るい茶髪の方が言った。

「俺、二年の星野珪（ほしのけい）。同じく長距離だよ、よろしく」

少し焦げ茶髪の方が言った。

「あ、ちなみに見ての通り双子！蓮が兄貴で俺が弟ね」

二人とも、髪色が違うだけで、
髪型や顔、背丈は見れば見るほど瓜二つだ。

「あ、加藤で「あのさぁー」

声をかぶせられました。
相変わらず口元はにこにこしたまま、ギロリと睨まれる。

何、何なのこの状況！

「さっき、詩織（しおり）さんと」

「何話してたの？」

二人してずいっと顔を近づける。

「・・・え？しおり・・？」

「呼び捨てすんなコラ」

「渡辺詩織（わたなべしおり）さん！

いや、お前らは“様”付けだな」

「あ、さっきの・・・」

「名前も知らないで話してたの！？」

目でけぇとか、鼻高ぇとか、

今は感心してる場合じゃなさそうだ。

それにしても、渡辺詩織って言うのか。

こんな形で知ることができるなんてな。

詩織さんって呼ぶのが無難だろう。

“様”はオーバーだって・・・・。

俺は二人がどうしてこんなに怒っているのか分からなかったので、

取りあえず前日の廊下での出来事を簡潔に説明した。

一真も昶も隣で聞いていて、

時々ふーん、と相づちを打ってくれた。

俺の話を聞いたとたん、

双子の表情が柔らかくなった。

うわ、こんなくしゃって笑えるんだ。

男の俺でも一瞬ドキッとしてしまう。

「なんだ、そんだけか」

「まぁあれだ、詩織さんに期待すんなよ」

「「あの人は俺のもんだから」」

・・・・・え？

「おい、珪。誰のだって？」
「え？俺のでしょ、蓮？」
「だからお前じゃ無理だって」
「蓮こそ馬鹿なこと言わないでよ」

俺のもの発言にはびっくりしたが、
どうもこの双子の言い争いを聞いていると、
二人とも詩織さんが好きらしいことが分かった。

次第に声が大きくなっている。

「俺の方がこーんくらい好きだ！」
「俺なんてこーーんくらい好きだもんね！」

「うっせーぞ双子ぉお！！」

双子の争いが小学生レベルになったところに、森岡さんが割って入った。

さすが部長・・・！

「どっちも渡辺の視界に入ってないのを自覚しろ！
おら、さっさとグラウンド行け！！」

「「も、モリ先輩のばかぁあああ！！！！」」

びゅーんと涙を流して走り去った。

どれだけ精神年齢低いんだろ。
年下の俺でも呆れてしまう。

当然それを座敷童が馬鹿にしないわけもなく・・・

「哀れじゃのう」

ふふっと可愛らしく笑っていた。

いや、可愛さも発言の毒舌さで半減って感じだ。

「ま、一年どもよ」

森岡さんが俺たちにかっと笑いかけた。

「変な奴多いけど楽しい奴らばっかだ。
仲間、大切にしろよ」

「・・はい！」

こうして俺たちもグラウンドに移動した。

今日から陸上部の仲間入りだ。

本当に風変わりな人達が多いと思ったけど・・・・

隣にいる座敷童を見たら、自分も十分人のことを言える立場じゃないな、と思った。

１０、これが僕らの陸上部（後書き）

評価してくださった方々ありがとうございます！
いきなりポイント増加に嬉しさでいっぱいです！！
初めてコメントまでいただけで、もはや有頂天でございます。
マイペースな更新ですが、これからも読んで頂けたら幸いです。
やっと登場人物がそろってきましたので、
私的にはこれからやっと本題に入っていきます（笑）
座敷童と愉快な仲間たち（？）をよろしくお願いします。

１１、間違えるよ人間だもの（前書き）

※訂正のお知らせ※

前話の「１０、これが僕らの陸上部」の部活動集会の場面での森岡弘毅と星野兄弟の台詞を訂正しました。

内容に差し支えがある程の訂正はしていないつもりなので、必ず読み直して頂く必要はありません。

それでは１１話をどうぞ！

11、間違えるよ人間だもの

この日、朝から俺に教室で、夢のような出来事が起きた。

「おはよう、涼介君」

「あ、おはよう美歩ちゃん！」

そう、朝から天使が俺に微笑んだのだ。

にやけまいと必死に自己制御していると、
美歩ちゃんはおもむろに、携帯電話を取り出した。

ん？挨拶だけじゃないの？

「あ、あのね涼介君・・・」

「うん」

なんだこの照れてる様子。
可愛すぎるんだが。

「あの、携帯番号とアドレス教えてくれないかな？」

・・・・え？

も、も・・・・・っ

「もちろん！！」

思わず返事が大きくなってしまった。
大好きな美歩ちゃんが、俺にアドレスを聞いてくれた！

しかも番号まで！

俺からじゃなくて、美歩ちゃんから！

ここ重要。

俺からじゃなくて、
み　ほ　ちゃ　ん　か・・・

「あああー！全くおぬしの頭はうるさいのぅ！
分かったからさっさと教えたらどうじゃ！」

俺が声には出していない心の叫びを、
座敷童は勝手に読み取り、耳を押さえて迷惑がっている。

まぁ、どれだけ俺がテンパってるかは十分想像できるだろう。

あぁ、そうさ。
どうせ俺は好きな子にアドレス聞く勇気も無いチキン野郎だよ！

俺は慌てて携帯電話を取り出す。

やば、美歩ちゃんと赤外線なんて夢みたい！

無事互いに送信が完了すると、
美歩ちゃんはニパっと俺に笑顔を向けた。

「ありがとう！」

「いやいや、こっちこそ・・・・」

「後は昶(あきら)君だけかな」

「いつでもメールしていいから！――・・・っえ？」

「あ！丁度良いとこに！昶君ー！」

「ちょ、ねぇ美歩ちゃん？」

丁度昶が教室に入ってきて、俺の前の席にどかっと鞄を置いた。

「おはよう、佐々木(ささき)さん呼んだ？」

「おはよう昶君。
あのね、携帯の番号とアドレス教えて欲しいんだけど・・・」

美歩ちゃんは携帯電話を昶に向ける。
そして二人は赤外線送信を始めた。

ちょっ・・・

ちょちょちょっと待ったあああああ！！

ナルシストの変態なんかに、美歩ちゃんを渡すものか！
俺は慌てて阻止しようと試みたが、
時すでに遅し。
二人はすでにアドレスの交換を終えていた。

や、ヤバい。

「美歩ちゃん、昶は確かにイケメンだけど変態で・・・！」

「へ・・・・？」

「何言ってんだ涼介？」

俺の心中とは裏腹に、キョトンとしている美歩ちゃんと昶。

すると美歩ちゃんが笑いながら言った。

「んー、良く分からないけど、桜木さんに、
一年生のアドレスは全員登録しておくように言われたんだよね。
一応マネージャーだから・・・・」

俺はその言葉を聞き、一瞬にして固まった。

マネージャーだから？

・・・・・・・・・・・・・

わああああああ！！
俺ってば勘違い野郎！！！

「えっ！？じゃあ、俺にアド聞いたのも・・・」

「うん。部活の連絡は私がみんなに回すことになるから」

恥ずかしさでいっぱいです。

「責任もって頑張るね！」

にこっとはじける笑顔。

そんな美歩ちゃんの笑顔に、思わず涙が出そうだった。

これは昶への恋心疑惑が晴れた嬉しさから？

それとも俺にアドレス聞いた理由が

事務的な理由だったという悲しさから？

どっちにしろ、穴があったら入りたい。
まさにそんな感じ。

美歩ちゃんが自分の席に戻ると、
座敷童が横から俺の制服の裾を引っ張ってきた。

「人間勘違いするときもあるものじゃ。
良かったではないか、
念願の美歩ちゃんのアドレスゲットじゃろ」

顔が全然人を慰める表情じゃない。
今にも笑い出しそうな顔をしている。

「ほっとけ・・」

先ほどの勘違いのダメージがあまりにも大きく、思わず顔が赤くなる。

「涼介も妄想力は十分、昶に劣らぬ変態じゃな」

このおかっぱ、イタいところをついてくる。

俺が座敷童を無視して顔をあげると、昶と目があった。
片手で頬杖をついて俺を見ている。
き、気づかなかった・・・・

「・・・・ふーん」

「な、なんだよ・・・」

「佐々木さんが好きなんだ」

ちょ・・・・・っ！！！！

「な、なんでっ」

「いや、反応見てれば普通分かる」

そんなに顔に出てたかな・・・

「いつもニタニタしてるんじゃ、当然じゃのう」

座敷童にまで言われる始末。

昶はくいっと眼鏡を直すと、にやっと口元を歪めた。

「良いんじゃない？彼女可愛いし性格良さそうだし・・・・いい声で鳴きそうだし」

「おい、小声で何か付け足しただろ」

「ま、黙っててやるから安心しろ」

言動にはいつも引っかかるものがあるが、やはり昶は良い奴だと思った。

俺は小さくサンキュ、と呟いた。

「・・・・胸小さいけどな」

「黙ろうか」

誰か数秒前の俺を殴ってください。

――――――――――――――――

授業が始ると、俺はノートをとりながら、
ふと座敷童の名前について考え始めた。

そういや、一真（かずま）と当ててやるって宣言したっけ。
新しい学校生活がバタバタしていて、
結局今まで、特に何もしていないことに気づいた。

隣にいる座敷童にちらっと目をやると、
世界史の教科書を楽しそうにペラペラめくっていた。
周りから見たら、ひとりでに教科書がペラペラしているのだろう。
想像すると、ちょっと不気味だな。
一番後ろの席で良かったと思う。

「こんな本一冊で世界の事が学べるなんて、すごいのぅー」

目をきらきらさせながら教科書の写真を眺める姿は、
普通の子供と変わらない。

それにしても、こいつはいつ生まれたんだろう？

名前を当てるには、まず座敷童の生きていた時代を
知る必要がありそうだ。

まさか今時の名前じゃ無いだろう。

スカイとかルイとかカイトとか。
無理あるだろって思うような読み方する名前もあるからびっくりする。

すると俺の考えてることが分かったのか、
座敷童が教科書から顔を上げた。

ぱっちりとした瞳で俺の目をじっと見てくる。

なんだ・・・・？

「はい、じゃあ加藤！」

いきなり授業をしている教師に名前を呼ばれた。
ハッと顔を上げると、黒板の文字をチョークでトントン叩いている。

「これやった人、前の授業で出てきたよな。
誰だったか言ってみろ」

げ、誰だっけ・・・

俺はさっとノートに目を走らせた。

「だ、ダビデ王？」

「おい、今ノート見ただろー！
ま、合ってるから多めに見てやるよ。
こいつは、その子供のソロモンなー」

無事回答できほっと息をつく。
そういや、最近毎日一回は授業で指名されている気がする。

なんでこんなにあたるんだろ。
ついてないな。

ん？もしかして・・・

俺は嫌な予感がして、さっと座敷童に顔を向けると、

バチッと目があった。

あ、逸らしやがった。

知らん顔をして再び世界史の教科書をペラペラ眺めている。

おい、こら、わらしこっち見ろ。

――――――――――――――――――――

結局、座敷童に無視されたまま授業が終わった。

休憩時間になり、俺が大きなため息をつくと
座敷童がくいくいっと制服の裾を引っ張ってきた。

無視したくせになんだよ。

俺は不機嫌そうに顔を向けた。

「まぁそう怒るな。
授業中に話しかけないのは勉強の妨げをしないためじゃ。
これも全て涼介の為、感謝しろ」

どこまでも上から目線のガキだなぁ。

それと、と座敷童は腕を組んで付け加える。

「教師に指名されるのも学力向上のため。
優秀なのは幸せな将来に向けての第一歩じゃ。
良かったな、涼介！」

そんな笑顔向けられても・・・

「やっぱりお前の幸せの提供の仕方、
回りくどいっての！！」

この時俺がクラスの視線を集めて恥ずかしい思いをしたのは、言うまでもないだろう。

12、なんちゃってボーイ

その後の授業でも座敷童の名前についていろいろ考えていたら、
あっという間に時間はすぎ、昼休みになった。

いつものように一真(かずま)と昶(あきら)と三人で弁当を開く。
しかしこの日は昶がいつもより早く食べ終え
「用事あるんだ」と席を立った事で、一真と二人になった。

いや、二人と子供一人でやっぱ三人だ。

珍しく三人になれたので、
俺は今まで考えていた座敷童の名前について
話を出してみる事にした。

「そう言えば、何もしてなかったね」

一真が申し訳なさそうに座敷童を見たが、
座敷童はふいっと顔をそらした。

「別に最初から期待などしておらぬ」

「まぁまぁ」

俺はツンとしている座敷童をなだめる。

「とりあえず、このクラスで同じ名前はいないのか？」

んーっと言いながら、座敷童は両手で頬杖をつき、
考える仕草をする。

ほっぺがぶにっとしてちょっと可愛い。

「クラスの自己紹介の時は、特にピンとくる名は聞かなかったのう」

・・・だよな。
そんな簡単に見つかるならとっくにこいつは成仏してるよ。

「少なくとも今流行るような名前じゃないよね。
天使と書いてエンジェルって読ませる名前もあるらしいよ」
「すごいなそれ」

例えの名前はさておき、
一真も俺と同じような事を考えているみたいだ。

「で、わらし。
お前の生きてた時代っていつ頃？」

俺の問いかけに、座敷童は少し小首を傾げるだけだった。
「・・・なんだよ」
「知らぬ」
「は！？」「えっ！？」

俺と一真の驚きの声が重なる。

「だから、知らぬと言ったんじゃ。
わしら座敷童に前世の記憶はない。
記憶があるのは一人目の契約者からじゃ」

「そ、そんなぁ・・・」

「じゃから、媒介のビー玉に関しても、
何か強い思い入れがあると分かるだけで、
どうしてソレがわしにとって大切なものかも分からないのじゃ」

俺は無意識に首から下がっている小さな巾着入りのビー玉を触って確認した。
いつも胸元でころころしている。

「じゃあそれって・・・」

「何も手がかりなしって事？」

うあーっと同時に声を上げ、俺と一真は机に突っ伏した。

一気に脱力。

簡単に当ててやるとか言ったけど、
それってかなり難しいんじゃないか？

たかが名前くらい・・・・
俺はそんな風に、軽く考えすぎていたのかもしれない。

手がかりがないという現実を突きつけられ、
俺と一真はしばらくうんうんと唸っていた。

「たろう」「違う」

「ごえもん」「違う」

「はちべい」「違う」

「信長、秀吉、家康！」

「違う違う違う！」

「アウグスティヌス！プトレマイオス！ソクラテス！」

「違う違う違う！！！」

「・・・ふざけてるじゃろ？」

「いや大真面目だ」

うん、なんか楽しいぞこれ。

「だから、無理だと言ったんじゃ・・・」

ほれ見ろと言わんばかりに、座敷童が溜め息をついた。

でも、俺にはこいつの「無理」って言葉は、

諦めの言葉には聞こえなかった。

心の奥では、お母さんに会いたくて、
寂しくてたまらないと言っているように聞こえる。

何とかして俺たちに当てて欲しいような、
期待が込められた言葉に聞こえるんだ。

「・・・・・・わらし・・・・・」

「同情するならビー玉よこせ」

「断る」

・・・・・やっぱ俺の考え過ぎです。

「じゃあさ、一人目の契約者とはいつ契約したんだ？」

俺は逆算作戦を思いついた。
最初の人から少し前が、きっと座敷童の生きていた時代だろう。

「ふむ・・・・今から２００年以上も前かのぅ」

「にっ、２００？！」
「いつだそれ・・・・」
「俺歴史弱いんだよねー」

一真はそんなことを呟きながら携帯で調べ始めた。

「・・・明治時代くらい？」
「まじか」

「初めての契約者は、
涼介よりもう少し年上の青年だったかのう。
懐かしいものじゃ」

座敷童は目を閉じ思い出に浸っているようだ。

「ざー君が２００年前の人だなんてすごいね」

「もっと長く座敷童をやってる者もたくさんおるがな」

じゃあこいつは、
２００年もいろんな人に幸せを与えてきたのか。

・・・・なんか、すげぇなって思った。

「・・・・その割に幸せの基準雑だな」

「文句があるのなら福はやらぬぞ」

「とりあえず、明治くらいの名前を探せばいいんだなっ」

睨み合う俺と座敷童をなだめるように、
一真が話をまとめた。

「どんな名前だよ、明治って」
「西郷隆盛？」
「違う」
「あ、板垣・・・・退助！」

「違う」

分かんねえーっと体を仰け反ると同時に、
昼休み終了のチャイムが鳴った。

ま、時代のヒントを得たんだ、少しは収穫だろう。

俺はいろんな思いついた名前をノートの隅に落書きしながら、
午後の授業を過ごした。

１３、１２人だよ全員集合！

放課後、ジャージに着替えて部活動のためにグラウンドへ向かった。
最初に部員全員が集合をしてあいさつをすると、
各種目ごとにマネージャーの桜木さんと相談をしてその日のメニューが決まる。
初めての時は、顧問の本田（ほんだ）の出る幕が全くないことに驚いた。

でもって、そのメニューの決め方が、さすが桜木（さくらぎ）さんってなるわけで・・・

「投擲ー」
「おう」

投擲って言ってもこの部活には、
ハンマー投げの部長、森岡（もりおか）さんしかいない。

「何する予定？」
「今日はウェイトトレーニング」
二人は細かい練習内容を話し合い始めた。
「―…で、それを5セット」
「うん、7セットいこうか」
「は？いや、今日は回数多くしたから・・・」
「あ？文句あんの？」
桜木さんは森岡さんに優しく微笑んでいるが・・・
背後のどす黒いオーラに誰もが一歩後ずさる。

とまぁ、こんな感じに半ば強制的にメニューがそれぞれ決まっていくのが
この陸上部のスタイルらしい。

自分たちのメニューは、他の種目が決めている間にそれぞれ確認される。

「俺たちもうすぐ記録会だからさ、一年生はロングジョグでいい？」
蓮(れん)さんが俺と昶に話しかけてきた。

ロングジョグは長い時間、程良いペースで走り続ける事だ。
ジョグはジョギングの略称。

一年生の間は体力をつける内容のメニューが多いから、
最近はほとんどどこれだ。

ちなみに記録会とは試合ではないまでも、
他の学校と一緒に走ることができる大会前の大事な機会だ。

星野(ほしの)兄弟はそれに向けた、スピード系の練習をするつもりらしい。

そういや、前に「俺たち専門は１５００だから」って、
二人して笑いながら言ってたな。

「いいですよ」

俺より先に、昶(あきら)が笑顔で返事をした。
俺も慌てて返事をする。

「じゃ、時間は６０分でサクラさんに交渉ね」
桜木さんの方へ星野兄弟が二人で歩いていくので、
俺と昶も慌てて追いかけた。

今は短距離の番だったようで、
一真（かずま）と男の先輩が桜木さんと話をしていた。

「りっくん達ミニハードルやるなら跳躍ブロックも一緒にやろうか」

桜木さんに“りっくん”と呼ばれたその先輩は、
背丈は俺とさほど変わらないが、短距離の選手らしい筋肉質な体つきだ。
この人が一真から聞いていた三年生の先輩だろう。
短距離には一人だけ、松田凛久（まつだりく）っていう
爽やかなお兄さんがいたと喜んでたっけ。

確かに体操のお兄さんでこんな感じの人いそうだな。

「渡辺（わたなべ）ー！田辺（たなべ）ー！ちょっとメニューの相談！」
凛久さんが詩織（しおり）さんと田辺千夏（たなべちなつ）を呼んだ。
あ、跳躍ブロックは２人とも“辺”がつく。
俺がそんなことを発見していると、２人はすぐにやってきた。

背の高い詩織さんに、田辺千夏はまるでコガモのように
後ろからちょこちょこくっついていた。

「凛久さん、なんでしょう」

あれ、詩織さん今敬語使った？
てっきり三年生だと思ってたけど、二年生だったんだ。

桜木さんの隣では美歩（みほ）ちゃんが一生懸命メニューをノートにメモしている。

頑張ってる美歩ちゃん、可愛いなぁ。

俺がそんな風に眺めている傍らで、
星野兄弟と桜木さんのメニュー相談が始まった。

先ほどの４人は練習の準備に取りかかろうとしている。
するとそこに、一人の小柄な男子がすすっと近寄ったのが見えた。
サラサラとした髪は前髪がやけに長く、顔の半分を覆っている。

「あの・・・僕も一緒に、やります」

「お、シノ！」

桜木さんが星野兄弟にとんでもない設定タイムを言って、
わあわあ言っているのが聞こえてくるが、
俺の興味は、この最後の部員の存在に注がれていた。

自己紹介をしているようなので、耳を立てる。

ボソボソ小声で何も聞き取れない。

すると、座敷童が急に頭の上から俺に声をかけてきた。

「聞きたいのか？」
「え？できるの？」
「容易いもんじゃわい」

ふふんと得意気に笑うと、座敷童はパチンと指を鳴らす。

「あ、僕・・・・・ハードルやってる三年生で、」

座敷童の指ぱっちんの直後、俺の耳には5人の会話が聞こえてきた。

「篠宮（しのみや）、雅紀（まさき）・・・・です」

「す、すげぇ」

俺は普通に驚いた。
座敷童って、魔法使えたのか？

「魔法とは違うぞ」

俺の心の疑問に座敷童が答える。

「涼介に利益のあることなら、可能にすることができるのじゃ」

あー、なるほど。

以前、座敷童は命をかけて主人を死から救うこともできるとか言っていたのも、
このたぐいなんだろう。

魔法なら面白いのにな。

しかし、おかげで顔が髪で隠れて見えない先輩は、

篠宮雅紀ということが分かった。
これでこの陸上部、全ての部員を把握できたんだ。

まとめると、投擲ブロックは部長の森岡さん。
ハードルブロックは篠宮さん。
跳躍ブロックは詩織さんと田辺千夏で、
短距離ブロックは凛久さんと一真。

そんで長距離ブロックは双子の星野兄弟に昶と俺。
マネージャーの桜木さんと美歩ちゃんを含めると、
この陸上部は１２人で構成されている。

あ、本田のこと忘れてた。

「さっきから顔が緩みっぱなしだぞ」

俺が満足感に浸っていると、突然昶が脇を肘で小突いて来た。

「あてっ」

ヤバい。また変な顔してたかも。

「おまえも、さっさと準備体操しろ。９０分だとよ」

「おー・・・って、え！？いきなり９０分ジョグ！！？」

少しは桜木さんの声にも耳を傾けておけばよかったと後悔をした。

昶とジョグに行く前の準備体操やストレッチを始める。

部活のときの昶は眼鏡からコンタクトレンズに付け替える。
走るとき邪魔になるからだ。
眼鏡の無い横顔は、付けているときよりも少し幼く見える。

だが目が大きくて、眉毛もキリッと整えられているため、
印象的なところは変わらない。
ジャージ姿で一層スタイルの良さが際立っている。
手足がすらりと長くて、全体的に細い。
理想の長距離ランナーの体系だ。

「９０分かぁ」

昶がぽつりと呟いた。

「どこ行く？」
「え？あぁ」
確かにグラウンドで９０分も走るわけにはいかない。
何より飽きる。
「公園から土手に行って、回って帰ってくるコースは？
一周８キロくらいあるやつ」
「じゃあ、そこ2、３周いくか」

よし、と意気込んだ時だった。
一つの心配が頭をよぎる。
そしてチラッと横を見ると座敷童が立っている。

こいつ、ついてこれるのか？

俺の視線を感じたらしく、座敷童もこちらに振り向いた。
にんまりと笑う。

「ビー玉、置いて行っても良いのじゃよ」

「逃げる気だろ」

ちっ、と舌打ちをして俺を睨んできた。

お前の考えくらいお見通しだっての。

すると座敷童は、ぐっぐっと腕を伸ばす仕草を始めた。

「ふん、安心せい」

こいつ、準備体操のつもりか？

「その気になれば飛べると言ったじゃろ」

え？

・・・・・・まさか。

――――――――――――――――――――

今俺は、昶と並んで走っている。
互いの呼吸音とリズミカルな足音が、耳に淡々と響いてくる。

「ほれ、頑張れ涼介！昶に離されてしまうぞー」

・・・・・雑音が入りました。

そう、座敷童が俺の斜め後ろに憑いてきている。

いや、着いてきている。

体はふわふわと浮遊し、時々呑気に欠伸なんかしてやがる。

うん。

どう見てもこれ幽霊。

とにかく気になる。

常に斜め後ろに気が散ってしょうがない。

邪魔だな。

「練習の妨害になるのか？」

ふよふよと座敷童が俺の肩に掴まってきた。
重さは感じないが、肩に手の触れている感覚がある。

そっか。
こいつ、俺に不利益なことは避けてくれるんだ。

そうそう！よく分かってんじゃねぇか！

声を出すと昶に不審な目を向けられそうだったので、
俺は心の中で一生懸命頷く。

「じゃからビー玉を置いていけと言ったんじゃ」

やだね。

けれどとりあえず、できるだけ離れて欲しいと思った。
俺は座敷童に気持ちが伝わるよう、強く心で訴える。
伝わっているのかいないのか微妙だが、座敷童は考える仕草を始めた。

「わしもどこまで媒介と離れることができるか分からんのじゃ」

そこをなんとかー！

「つか、独りとか寂しい。嫌じゃ」

“つか”って言ったよこの子。
そしてさり気なく寂しがり屋。
駄々コネ上手。

この際どこまで離れることが可能か
試してみるのもおもしろそうだと思った。
気づいたら土手が見えている。
川沿いに走る間はひたすら直線だから、
良い具合にお互いの距離が分かるだろう。

「試してみないか？」

俺はボソッと座敷童に提案する。
運良く、ランニング中のおばさん3人とすれ違ったので、
昶は全く気づいていない。

ラッキー。

座敷童は最初嫌そうな表情を浮かべたが、
肩を落として了承した。

「しょうがないのう。じゃあ下がるぞ」

そう言って溜め息を漏らした直後、
座敷童はピュッと小さな風のような音と共に、
あっという間に俺の遥か後ろへ飛んでいった。

チラッと振り向くと、遠くでなんだかゆらゆらした黒い物体が見える。
あ、俺視力だけは良いんだよね。

多分あそこが限界なんだな。
ざっと直線距離で５００メートルくらい。

まぁこんなもんか。

座敷童が後ろに下がってくれたおかげで、
俺はやっと走ることに集中できた。

だが、少ししてから今度は隣で走っている昶が気になりだした。

そういやこいつ、スタートしてから一度も俺に話しかけないな。

チラッと腕時計を見ると、まだ２０分くらいしか経っていない。

９０分ジョグだから、まだまだ時間はある。

せっかく昶と二人になれたのだから、
俺は最近引っかかっていた事を聞いてみようと思った。

「・・ふっ・ふっ・・なあ」

「ん？」

走りながらで息は若干上がっているが、
程よいペースなので話すのは辛くない。

むしろ昶なんて、かなり涼しげな顔をしている。
こいつ本当に今走ってんのかよってくらい。
だが風になびくサラサラした黒髪やおでこに軽く浮かんでいる汗を見ると、
やっぱり走っていることを思い出す。

俺は走るリズムを保ちながら、昶に話しかけた。

「昶さぁ、そんなに俺と走るの嫌なわけ？」

「・・・・はぁ？」

チラッと眉間にしわを寄せて俺を見る。

「なんでだよ」

「だってさぁ」

気づけば土手から学校の方へ曲がらなくてはいけない道が見えた。
方向を変えて、狭い道に入る。
車道を空けるために、一列でなければ進めないような道だ。

自然と俺が昶の前に出てしまって、昶の顔が確認できなくなる。

それでも俺は言葉を続けた。

「部活動集会の時、俺と種目が一緒って分かった瞬間
一気にテンション落ちてたじゃん」

車などの雑音に負けじと、昶に声が届くように少し大きな声を出す。

「・・・・そうだっけ」

うわ、しらばっくれる気か。

「それにさあー」

さっきよりちょっと大きな声。

「今も、走ってる時も何か俺を避けてんじゃん。
初日に一真と俺ら三人で走ったとき、お前めちゃくちゃ楽しそうだったぞ」

昶の足音を意識しながら一気に話した。
どんな顔してるか超気になるな、これ。

「・・・・・・」

後ろからは呼吸音と足音しか聞こえない。
早くこの狭い道終われ！

俺は重い空気に耐えきれず言葉を発する。
「なあ・・・・
そんなに俺と長距離やりたくないの？」

「ちょっと違う」

突然昶の声がした。

やった、あの角曲がれば広い道だ！

道を曲がると、昶が再び俺の横に並んだ。
チラッと表情を確認する。

うわ、すごいしかめっ面。
口をムスッと尖らせて、眉間にはしわが寄っている。
何か困ってるような悩んでるような
・・・・いや、怒らせたかな？
俺がドキドキしていると、昶も目だけを向けてきた。
はぁっと重いため息をつく。
やべ、地雷踏んじゃったかも・・・・！

「何そのびびったツラ」

飛び出した言葉はグサッと俺の背中から突き刺さる。
えええええ！？そんなに顔に出てた？
わー、自分から聞いといて恥ずかしい・・・・
でも、今の一言で緊張感が解けた気がする。
昶も眉間のシワが消え、いつもの様子に戻っていた。
腕時計を見ながら走っている。
あ、学校だ。

いつの間にか一周が終わっていた。
昶が時計を見ながら呟く。
「３０分ちょっとか」
俺もつられて時計を見る。
「後１時間くらいあるな」
気づけば学校の横を通り抜け、２周目に突入しようとしていた。
昶が顔を上げる。
「さっきの答え」
「えっ？うん」
突然の返しに俺は思わず声が裏返った。
昶は真面目な顔をしてる。
「涼介が、そのうち俺を嫌いになるんじゃないかと思ってる」
「はあ！？」

俺は予想外の答えに驚いたあまり、危うく車道に飛び出しそうになる。

昶はそんな俺を見てくすっと笑った。

「お前って、不思議だな」

「え？」

「何か、楽。話しやすい」

昶は正面を向いたまま言葉を続けた。

「ちょっと、昔話聞かせてやるよ」

俺はその時、心なしか昶のペースが上がったような気がした。

１３、１２人だよ全員集合！（後書き）

お気に入り登録してくださった皆様、
このような初心者小説にお付き合いくださり
本当にありがとうございます！
感謝感激で胸がいっぱいです！！
亀更新ですが、今後もどうぞよろしくお願いします。

１４、美形はつらいぜ

「俺、足速いんだよね」

「・・・・え？」

昶（あきら）が突然自慢話を始めた。

いやいやいや！

昔話ってただの自慢話？

予想外の流れなんですけど！

驚く俺にお構いなしに、昶は真っ直ぐ前を見たまま話を続けた。

「中学の時、３０００メートル走で全国にはギリギリとどかなかったけど、

県大会じゃ敵無し。その上の大会は、８位で悔しかったな」

「すげぇ・・・・・」

思わず気持ちがそのまま言葉になる。

「でも、昶が県のトップなら、俺が昶を知らないとかおかしくない？俺だって中学から陸上やってたし」

県大会止まりだったけど。

「あぁ。俺、高校で隣の県からこっちに引っ越して来たから」

「あーなるほど」

そりゃ知らないわけだ。実業団や大学生は別として、あんま他の県の選手なんて注目してなかったからな。

全国の手前ならまだしも、そのまた手前なら、名前を知らない人は多い。

「・・・・ん？」

それで？

「なんで俺が嫌いになるの？」
「だってお前、嫉妬するっしょ」
「はい？」
俺の疑問の声に昶がチラッと反応する。
「俺に追いつけなくて、嫉妬するよ」
意味わかんない。
「するかよ」
俺は少し低い声で返した。
「俺は走るのが好きなだけだ。
そりゃ試合で勝つのは楽しいけど、お前に負けて嫉妬するほど弱くない」
つか負けるとも限らんし。
いや、負けるだろうけど。

それでも昶は、リズムを乱すことなく走りつづける。
俺もそんな昶にペースを合わせて走る。
土手が遠くに見えてきた。

「中学のとき、部活内でも一番だった」

だろうね。

「んでもって、このルックスでしょ？
頭も良かったし、モテるよね」

いくら昶とはいえ、いい加減イライラする。

「何が言いたいんだよ！」

「初めは、長距離の同級生にハブられた」

・・・・・・・・あ。

「次に上級生から、調子のんなとか言われて、
記録が勝てないからって妬まれた」

昶の言いたかったことが、だんだんと分かってくる。
俺は何も言わずに耳を傾けた。

「んで、終いには女とっただろって言われて殴られた。
俺はその時彼女いたし、その先輩の女も顔しか知らなかった。
でもその女が俺のことかっこいいとか言ってて、
アドレスを先輩に聞いたらしくて。

女にキャアキャアわめかれるほど、俺を見る友達の目は変わっていった」

淡々と話す口調が痛々しい。
昶の言葉はもう、自慢話なんかには聞こえなかった。

「そんで、大事にしてた彼女にもフラれた」

「えっ」

俺は思わず昶を見た。表情は無表情のままだ。

「彼女まで、影で女友達にいじめられてた。
俺とは不釣り合いだとか言われたって。
実際はもっと酷いことも言われてたみたいだけど、
俺にはごめん、って頭下げただけだった。
辛い思いしてたのに、気づいてやれなかった。
あの子の友達はみんな、俺に近づくために彼女を利用してたんだ」

一瞬だけ、昶の顔が歪んだ。
ギュッと唇を噛みしめる。

そんだけ、彼女のこと大好きだったんだな。

俺たちの空気とは裏腹に、土手は無邪気に遊ぶ子どもの声が響いている。

「俺、走るの好きなんだよね」

「あ、うん」

俺は以前昶に種目を聞いたときの、キラキラした瞳を思い出した。
だから、あんなに輝いてたんだ。

あの時の目の力強さ。
軽い気持ちで陸上やってる奴には絶対宿らない光だったと思う。

「俺も好きだよ」

昶はチラッと俺に目を向ける。
ちょっと口元が緩んだ気がした。

「どんなに妬まれても、陸上は止められなくてさ」

もうすぐ土手が終わる。

「時々絡んでくれるいい奴らもいた。
でも上辺だけの付き合いじゃん。
元々群がるのは嫌いだったし、独りでもいいやって開き直ってた。
走るか勉強するかって感じで、中三はほんと独りでいたな・・・・」

道を曲がったとき、ちょうど赤信号に引っかかった。

俺も昶も足を止める。
フゥフゥ漏れると荒い息を押さえていると、昶がぽつりと呟いた。

「そんな時、両親が離婚した」

「そんな・・・・・」

まさかとは思っていた。

あまりにも平穏な家計で育ってきたからか、
離婚って単語は俺にとって、あまりにも非現実的な用語だった。

俺が何も言わずにただ驚いていると、信号が青に変わった。

再び走り出したところで、先ほども通った狭い道に出た。
今度は昶が俺の前を走る。

「ま、丁度良かったよね。高校デビューしてやろーってさ」

前から昶の明るい声がした。
かなり、無理してるような声。

俺はただ、昶の揺れる黒髪を見つめた。
前を行く昶の背中は、いつも教室で見慣れている背中だ。
細いくせにちょっと肩幅広くて、がっしりして見えるんだよな。

「・・・・だからさ、」

昶が背中を向けたまま話し続ける。

「高校は陸上部が有名じゃないとこ入って、
独りで楽しく走ろうって考えてた。
そしたら涼介(りょうすけ)が、長距離だったからさ」

「あぁ」

そう言うことだったんだ。

「またあん時みたいにつまんない生活ヤだなーって考えてたらさ、
態度に出ちゃってたよね。俺我慢とかできない性格だから」

もうすぐ狭い道が終わる。

「あー・・・・久しぶりにいっぱい喋った」

昶が少し後ろを気にする。

「どう？」

どうって・・・・・

「俺の昔話、引いた？」

「・・・・・・・・・」

俺は何も言わなかった。

足音と呼吸音だけが耳に響く。

あ、これ、一周目の時と反対だ。

振り向かないけど
何も言わないけど
昶もさっきの俺みたいに、不安になってたりすんのかな。

「ちょっと違う」

狭い道が終わりそうなタイミングで、
俺はあえて、先ほどの昶と同じ言葉を返した。

広い道へ曲がると、俺は昶の隣に並んで顔を見た。
驚いてるみたいで、大きく見開いた目で俺を見ている。
そんな昶に、俺はにやっと笑ってやった。

「さっきの答え」

「んっ？あぁ」

昶の話を聞いて、素直に思ったこと。
俺のたどり着いた答え。

「ドSでナルシスト」

「・・・・・は？」

「ロリコンのくせに巨乳好きの変態」

俺が再び歯を出して笑ってみせると、
昶はますます意味分かんないって顔になる。

「俺、とっくに引いてるんですけど」

「は？」

「誰がお前を僻(ひが)んだりするかよ。
お前こそ、俺が普通過ぎて羨ましくなるぜ」

すると昶は、俺の言葉にハハッと笑った。

「誰がお前なんか羨むかよ」
「それでいーの」

学校が見えてくる。

「昶は堂々とかっこつけてんのが合ってるよ。
何様俺様昶様だろっ！」

「ハハ！流石に言わねぇよ」

昶が笑ってる。

いつもの愛想笑いみたいな笑い方じゃなくて、
口開けて、目ぇ細くして笑ってる。

俺はなんだかとても嬉しくなった。

「涼介に、話して良かった。何か楽んなった。
思いっきり部活できるわ」

「何だよ、昶からそんなん言われると気味悪いってのー」

「あぁ、俺涼介みたいな奴好みじゃ無いから安心して」

・・・・いや、誰も期待してねぇよ。

「あと、人に言わないで欲しい。
一真(かずま)にもそのうち、ちゃんと話すつもりだから」

「うん」

それは一真も信頼してるってことだよね。
三人の仲は上辺だけじゃないと感じると、
なんだか胸の奥が暖かくなった。

「３５分越えてるな」
急に昶が腕時計を見て呟いた。
一周がさっきよりも遅くなっている。
信号も引っかかったしな。

「後３０分・・・・もないな。どうする？」
もう学校の横だ。

「上げるか」
「まじで！？」
「ラスト行くぞ」
「・・・・おう！」

俺たちは学校で止まらずに走り抜ける。
さっきまでのペースよりも速く走るために、
蹴り上げる足にぐっと力を込めた。

「あ、それと涼介」
「ん？」

昶が俺を見てにやりと笑う。

「俺は変態じゃなくて、自分に素直なだけだから」

「え？なに？聞こえなーい！」

「おい、もやし。調子のんなよ」

キメ顔なんかに怯むものか。
さっきの昶の笑顔にキュンとしたなんて、
口が裂けても言うもんかと、心に決めた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

三周目を終えて、俺と昶はグラウンドに戻ってきた。
俺は着くや否やばたりと、土の上へ倒れ込んだ。

「昶・・・・鬼畜ぅー・・」

「さすがにちょっと疲れたな」

俺とは正反対に、昶は汗をキラキラさせながら爽やかな笑顔。

確かにこいつ、速いな。

途中からは昶の少し後ろに必死について走る形になり、
ほとんど会話をすることもなく三週目を走り切った。

「あ、二人ともお疲れ様。５分オーバーだけど、
長く走るのは良いことだから大目に見てあげるわね」

へばっている俺とタオルを片手に汗を拭く昶の元へ、
桜木（さくらぎ）さんがやってきた。

「じゃ、その勢いで１５０メートル５本行ってみよーう！」

「えええ！！？」

笑顔できゃぴっと拳を突き上げる桜木さんの笑顔に思わずシャウト。

もちろん、叫んだのは俺だけ。

その後、がむしゃらに１５０メートルを走り終え、
何とかその日のメニューは終わった。

「涼介！昶！お疲れー！！」

部活の挨拶がおわると、一真が笑顔で話しかけてきた。
グラウンドから学校に向かって歩きながら話をする。

「いやー、最後の１５０メートルすげー良かったよ！いい走りしてた！
それにしても昶の走り方ってすっげぇかっこいーのな！
短距離も向いてるんじゃないの？」

「よく言われる」

さすが昶、さらりと笑顔だ。
こいつ“謙遜（けんそん）”って言葉を知らないのか。

「涼介もよかったぜ！
久しぶりにあんな必死なお前の走り見れたわー」
「おい、馬鹿にしてるだろ」

けらけら笑う一真を俺は軽く睨み付ける。

「まぁまぁ」

するといきなり、一真はすっと俺の耳元へ顔を近づけた。
「それより諒介」
ぼそっと小声で話しかけられる。

「ざー君どこにいるんだ？」

「え？」

「ざー君だよ！お前一緒に走りに行っただろ？」

・・・・・・あ。

あああああああああ！！！！

「忘れてた！！！」
「はぁ！？」

俺の突然の大声に、昶もびくっと反応した。
「な、どうした？」
「いや、なんでもない！」
一真がすかさずフォローを入れる。
座敷童の存在を忘れていたことに気づかされた俺は、
衝撃のあまり、自分でフォローする余裕すら無かった。

「一真！昶と先に学校戻ってて！」
「お、おう」
一真が昶の背中を押して校舎の中へ入って行くのを確認すると、
俺は慌ててグラウンドへ逆戻りした。

何で置いて行ったんじゃ！
とか
涼介の馬鹿あ！

とか

座敷童に泣きつかれる様々なイメージが頭に浮かんでくる。

でも確か、媒介と離れられる限界の距離は
５００メートルほどのはず・・・・

まさか逃げるわけないだろう。

それとも一応まだ子供だし、帰り道に迷ったりもするのかな？
それで帰れなくなって一人道端で泣いてたりするのかな？

どうしよう。どうしよう！

マイナスの考えばかりが頭を駆け巡る。
俺は急に座敷童に対して申し訳ない気持ちと心配で
胸が苦しくなってきた。

「わらし――ッ！！！」

「おい」

「ぎゃああっ！！」

え、わらし！？

「わん！」

「・・・・・・わん？」

グラウンドから学校の敷地外へ出たすぐその道で、座敷童を見つけた。

さきほどまでの考えていたマイナスイメージを全て裏切る

いつもと変わらぬ表情で、淡い色の着物を着た男の子はそこにいた。

ただし、一人じゃない。

「・・・・な、なんだそいつ」

クリーム色の毛でふさふさと覆われた、大きなその生物の上に、
まるで馬に乗るかのようにまたがって俺を見上げている。

「犬じゃ！」

「いや、見りゃ分かる」

つぶらな瞳で見つめるわんこ。

・・・・・よし。落ち着け、俺。

ふぅっと深呼吸をして上がっていた息を整える。

「なぁ、涼介・・・・」
「ちょっと待て」

俺は座敷童の言葉を遮った。

「いいか、わらし」

ゆっくりと、落ち着いた声で言う。

「いい子に、ここで待ってろよ」

別に、動揺なんかしてない

・・・って言ったら嘘になる。

なんだろう。

がっかりしたようなこの気持ちはなんなんだろう！

とにかく俺はそれだけ言うと、

座敷童の返事を待たずに一目散に、学校へ戻った。

15、おかっぱも歩けば棒にあたる

さっきまでバテて倒れてたのが嘘みたいな速さで俺は学校に戻った。
そして素晴らしい早さで着替えて帰る支度をし、再び全速力で座敷童の元へ戻った。

他の生徒たちが帰宅し始める中、俺は校門ではなくグラウンドの裏口へ向かう。
座敷童はちゃんと、先ほどと変わらぬ状態で待っていた。

俺は上がっている息を整える。

「はぁ　はぁ・・・・で・・・」

俺は改めて座敷童の乗っているその生物を見た。
真っ黒なつぶらな瞳で俺を見上げている。

「なんなんだ、それ」
「じゃから、犬だと言ったじゃろうに」
「いや、俺が聞きたいのはそうじゃなくてー」
「ラブラドールレトリバーだね」
「あぁ、確かそんな種類・・・・」

ん？いやいや・・・

「そうじゃなくて！！てかなんだよ一真、急に話に加わるな！びっくりしたよおい！」

いつの間にか隣で一真が、目を輝かせてその犬を見ていた。

「あ、ごめん。涼介があんまり慌ててたから、心配でつい」

まぁ心配してくれたのは有り難いし、
一真は座敷童が見えてるから問題はないんだけどな。

「何がどうして、わらしが犬と仲良くなっちゃったのっていうのを聞いてるの」

すると座敷童は犬の頭をなでながら、フゥッと大きなため息をついた。

「なんなんじゃはこっちのセリフじゃわい！
涼介があっちこっちで曲がるせいで、わしは木の中、草の中、家の中と、

あっちこっち通り抜ける羽目になって大変だったんじゃぞ！」

俺は昶の話に夢中になっていたことを思い出す。

「あ、あぁ。それは悪かった・・・・」

「わしが退屈しながらふよふよ涼介に引っ張られてる時じゃった」

なんか急に語りモード。

「こやつが笑顔でわしを追いかけてきたのじゃ」

「は？え、それで？」

「あんまりにもわしについてくるもんじゃから、一緒に走り回ってたとゆうことじゃ」

座敷童はにこにこと嬉しそうに犬の頭を撫でる。

犬もそれが嬉しいのか、尻尾を振って頭を座敷童の手にすり寄せていた。

「でも、なんで犬がわらしに構うんだ？」

「動物ってさぁ」

一真が人差し指を立てて話に入ってきた。

「人よりいろんなもの感じ取る能力高いって言うじゃん？
だから幽霊とか、分かるんじゃない？」

「うわ、てきとー」

「だっ　だって良くテレビのドキュメンタリーとかでも扱ってたりするじゃん！」

まぁ、確かに一真が言うのは一理あるだろう。
実際この犬の様子を見ていると、完全に座敷童を意識している。

「可愛いねぇ」

一真まで犬を撫で始めた。

「あっ」

「どうした？」

突然一真が声を上げた。

「この犬、首輪ついてない」

「野良？飼い犬じゃないのか？」

座敷童に走ってついて来たなんていうから、てっきり人になれた飼い犬だと思っていた。
今も現に大人しくしてるし。なんだ、ただの野良犬か。

「なに！おぬし主人がいないのか？」

「クウン」

一真の言葉に座敷童も反応した。
どうやら今まで気づいてなかったらしい。

てか、飼い犬だったら連れて来ちゃ駄目でしょ。

俺はスクールバッグをぐっと肩にかつぎ直した。

「犬の事は分かったから。そろそろ帰るぞ」

「だな、帰ろ帰ろ！お腹空いたー」

俺と一真が歩き出し、座敷童もついて来る。
俺がくるっと振り向くと、座敷童は立ち止まった。
正確に言うと、座敷童を乗せた犬が立ち止まった。

「おい」
「なんじゃ？」
「降りろ」
「なんでじゃ？」

俺はハァと溜め息をついた。

「なんでじゃないだろ、犬は置いていけ」

すると座敷童の顔がみるみる歪む。

「いいではないか！こやつはこんなにお利口さんなんじゃぞ」

駄々をコネる子どもの声だ。
何か面倒くせぇ。

「なんでも何も、家に連れて帰れるわけないだろ」
俺は呆れた顔を座敷童に向けた。
むぅーっと口がへの字に結ばれてる。
俺は大きな犬が苦手だった。
幼いときに近所の黒い大きな犬に追いかけられて
怖い思いをしたのがトラウマになっている。
ダメよパピィちゃん！と叫ぶおばさんの声と
パピィちゃんの大きな鳴き声が、今でも鮮明に思い出せた。
どこがパピィ（子犬）だ馬鹿やろう！
って思いながら逃げたよね。
そんなわけで、小型犬ならまだしもこんな大きな犬を連れて歩きたくない。

座敷童はムスッとした表情のままぴょんっと犬から降りると、名残惜しそうに犬の頭を撫でた。

「・・・・残念じゃが、お別れじゃ。元気でな、ポチ」

去り際に名前を付けないで欲しい。

「クゥン・・・・」

寂しそうに鳴く犬に向かって何度か振り向きながらも座敷童は俺の元へやって来た。まぁ聞き分けてくれてたのは助かった。

良い子じゃん座敷童。

「よし、帰るぞ」

「じゃあねーポチ！」

「お前もか」

犬に手を振る一真にびしっと突っ込みを入れ、歩き出した。

――――――――――――――

・・・・・・・ついてくる。

別れを告げたはずの犬が、相変わらず俺たちの後ろをついてくる。

すれ違う人が時々、手綱が無くてもお利口さんねー
なんて言っているのが耳に入る。

いやいや、うちの子じゃありませんから。

「おい、一真。何とかしろよー」
「そんなこと言われてもなぁ」
「このままじゃ家着くじゃん」
「確かになぁ」

ちらっと振り返ると、犬は尻尾をゆらゆらさせながら
愛嬌のある顔で俺を見上げてくる。

可愛くないわけじゃない。
でも、無理。大きいとか無理。

「こらポチ！ついて来ちゃいかん！」

座敷童も先ほどから何度も犬を追い返そうとするが、
言葉ではそう言っていても実際は離れたくないと思っているのが
寂しげな表情から伝わってくる。

いよいよ一真と分かれる道につく。
俺が立ち止まると、一真も足を止めた。
正直、この犬を一人でなんとかする自信がない。
こいつ明らかに俺や一真じゃなくて座敷童についてきてる感じする
んだよな。

「どうすっかなー・・・・」

「クァン」

鼻を鳴らして座敷童に体をスリ寄せている。

「すごいざー君に懐いてるね」

一真も腰を屈めて犬の頭を撫でた。

「俺、犬好きなんだよねー」

それに応えるように、犬は一真の手をペロリと舐めた。

「わ、ポチ可愛い！」

「だから、ポチ言うな」

「ポチ、おぬし寂しいのか？」

不意に座敷童が、ポチの顔を覗き込みながら話しかけた。

・・・・もう、ポチでいいや。

「分かるぞ。わしには分かる。おぬし、寂しいのじゃな」
何度も優しく呟きながら、座敷童はポチの頭を撫でた。

「のう、涼介」

突然座敷童は、目をウルウルさせて俺に振り向いた。

何、この目。
嫌な予感しかしないんですけど。

俺は反射的にビクッと一歩後ずさる。

「な、なに？」

俺は冷や汗混じりに問いかける。

「ポチが野良犬なら、こやつは独りじゃ」

「それが？」

「可愛いそうだと思わぬか？」

「まぁ・・・・」

俺は座敷童の潤んだ瞳に耐えられず、思わず一真に目を向けた。
一真も困ったような顔をしている。

「のう、涼介」

いつになく甘えた声が気持ち悪い。鳥肌たつわ。

「い、言いたいことはハッキリ言え」

「ポチを飼ってやらんか？」

率直過ぎてびっくりです。

「駄目だ」

「何故じゃ！！！」

真顔でサラッと言い放つと、座敷童はいつもの様子に戻っていた。
こいつ、おねだりの時は演技派です。

「飼えるわけないだろ。つか俺、でかい犬嫌いだし」
「え、涼介犬嫌いなの？」
「でかいやつ限定」
「だからさっきから近づこうとしないんだね」
「何故じゃ！こんなに愛らしいではないか！」

んなこと言われてもなぁ・・・・

改めてじろりとポチに目を向ける。
相変わらずハッハッと舌を出して尻尾を振っている。

真っ黒な鼻と瞳。
毛並みは野良犬生活の辛さを語るかのように、ところどころ汚れている。

よく見ると草とかついていて汚い。

うん。やっぱ無理。

「独りは、寂しいのじゃぞ・・・・」

ポチに抱きついたまま俯いている。

「話す相手も、笑ってくれる相手もいないのは、寂しいんじゃぞ」

「そう言われても・・・・」

突然、座敷童はキッと俺を睨みつけた。

「涼介は、独りの寂しさが分からないからそんな事を言えるんじゃ！」

迫力のある座敷童の声に、俺は思わずびくりと怯んだ。

「わ、分かるよ！俺だって一人っ子だし・・」

「違う！涼介には母殿も父殿もいるではないか！
本当の独りの寂しさを知らないんじゃ！！
だからそんな冷たい事を言えるんじゃ！」

座敷童は両手の拳を握りしめ、大声で俺に向かって怒鳴っている。

こいつ、本当に泣いてる・・・・・・？

「涼介には・・・・涼介には独りの寂しさが分からないんじゃあああ！」

「わらし！！？」

俺は手を伸ばしたが、遅かった。

あっという間に座敷童はポチにまたがると、
細い路地裏に向かって走っていった。

「ざー君！」

一真も驚き、二人で慌てて追いかけたが、
そこは俺たちが通るには狭すぎた。

「反対側に回るぞ」

「う、うん！」

急いでその道に繋がっているであろう場所を目指して先回りしようとしたが、
完全に座敷童とポチの姿を見失った。

今までにない焦りに襲われる。

初めて見た座敷童の涙。

いつもの毒舌で子供らしかぬあいつが、初めてガキみたいに涙を流して怒った。

自分の心臓の音が、どくん、どくんとうるさいくらいに響いて聞こえる。

なんかヤバい。

俺、座敷童に酷いこと言った？

「手分けして探そう！」
一真の言葉でハッと我に帰る。
「あ、あぁ。探そう！」
「俺あっち見るから、涼介はこっちね」
「分かった。２０分後にまたここで会おう」
俺は一真と反対の方へ向かって走り出した。

座敷童を怒らせた。

そんなのいつもの事なのに、
先ほどの座敷童の様子はいつもとまるで違っていた。
胸の奥がズキズキ痛む。

ポチを飼えないと言ったから？
それだけであんなに激怒するもんか？
正直、子どもの心は判らない。
独りの寂しさを、理解できなかったから？
座敷童の言葉が頭の中で繰り返される。

『独りは、寂しいのじゃぞ』

どこだよ
どこ行ったんだよわらし！！
結局２０分探しても、座敷童は見つからなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4789v/

座敷童を飼ってみた

2011年12月22日23時59分発行